

同和教育のよろこび

3年A組担任 森口 健司

本年度の「峠を越えて」のまとめとして、昨年夏、徳島市の幼稚園・小学校・中学校の先生方に「同和教育のよろこび」と題して話をさせていただいた記録を掲載する。この講演は、全体学習を始めた生徒たちとの授業をビデオを通して紹介しながら話をしていた。その授業記録のすべてを掲載する。本年度の全体学習の授業記録もそうであるが、授業で語られた生徒の言葉はいつまでも私を励ましてくれる。以下講演の記録である。

※

演題「同和教育のよろこび」～スダチの苗木とキンカンの苗木～

1993年8月2日

会場 徳島市文化センター

板野中学で実践してきた同和教育への取り組みが、今年で4年目を迎えている。現在、板野中学校での同和問題学習の取り組み、その中で私自身が学び感じてきたことを明らかにしながら、同和問題解決に取り組んでいく同和教育の意味や大切さを私なりにまとめてみたいと思う。

4年前板野中学校に赴任した年、私は2年B組というクラスを担当した。私は担任した2年B組の生徒たちと出会った学級開きの日に、私は同和教育に寄せるさまざまな願いや思いを生徒たちに語っていった。4月8日の学級開きの日から、同和問題によせる私の思いや同和教育によせる私の思いを聞いた生徒たちは、様々な思いを私にかえしてくれた。

4月後半に入った頃だった。Y子という女子生徒が、私の語った一つの言葉に非常な衝撃を受けた。これは高等学校でおこる差別事象や差別事件の中で同じ中学校からきた進学した仲間が、共に頑張ってきた中学校時代の仲間を売るという状況。自分が部落の人間でないということを示すために、同じ中学校で部落問題学習に取り組んできた仲間を「〇〇さんが同和地区だ。」「〇〇さんが部落の人なんだ。」ということ語る。仲間のことを語ることで自分がそうでないということを示していく差別事象や差別事件。そんな関係でみんながあつてほしくないと訴えた。Y子はその訴えに大きな衝撃を受ける。そして、Y子は翌日の生活記録にその思いを記してきた。「先生、私は先生が言うように、実は友だちを売りました。板野中学に入学してきたとき、N小学校から来た友だちは、N小学校には学習会がなかったので、私たち、M小学校からきた生徒たちに、何か特別な感情を持っていました。私はN小学校から来た友だちと非常に仲よくなりました。そのときにその子に言われた。『Y子ちゃん、部落……』って、私はそのときに部落と思われるの嫌やから、一生懸命違うと言った。それだけじゃなくて、そのことをきちつと示すために、同じM小学校からきた同和地区の友だちを私は売りました。『〇〇ちゃんがそうよ。〇〇ちゃんもそうよ。』と言った。その子は言いました。『ええ、あの子がそう。あの子もそう。そういうふうに見えんなあ。』と言いました。」

生活記録は非常な衝撃を私に与えた。部落差別の中に生徒たちが喘ぎ、その中に存在しているということ。そして、そのときに中学校入学当時、中一の段階からそういう現状があるということ。そして、その子らは、今クラスが違う。それぞれのクラスでどんな思いで、今、同和教育をつみ上げているのだろうか。そのときに思ったのが一つのクラスだけがいかに頑張っても、特定の教師だけがいかに取り組んでも、それがなかなか確かなものになっていかない。それが確かな同和教育になっていかない現実なんだということを実感した。その当時、学年主任でおいでたN

先生を中心に話し合った。その話し合いの中で、以前に羽浦中学校で取り組まれた学習オリエンテーションの形態に同和問題学習を重ねてみようということになった。一つのクラスがどんな同和問題学習の授業をしているか。一つのクラスがどんな思いを込めて同和問題学習に取り組んでいるか。その状況を他のすべてのクラスが授業を見る。その授業を見た次の時間に学年全体で、同和問題によせる本当の思いを語り合う。そういう状況をつくっていこう。そういう取り組みをしていこうということでこの取り組みが始まった。この一つのクラスの公開授業を学年全体が見て、その後で学年全体で同和問題について話し合っていく。この2時間続きの授業を後に全体学習という呼び方をするようになった。この取り組みは普通の研究授業ですら、我々教師にとって重たいものがあるのに、それを体育館の真ん中で、先生方だけでなく他のクラスの生徒たちにも授業を見せるとするのは教師にとって本当に厳しい。それを初めてする教師には、どうしてそんなことをしなければならないのかという思いになった授業の形態だった。

4年前の5月、私のクラス2年B組が「渋染一揆」の授業をした。すかさず、C組が北代色さんの「夕焼けは美しい」という資料に取り組んだ。その中で私たちが、私たち教師が予想もしなかった高まりをその授業が生んでいき、全体学習は1回、2回、3回繰り返されていく。当時、2年生は5クラスあった。すべてのクラスが1回は公開授業しようという話をし、1回、2回、3回、そして4回目の授業のときだった。

1990年12月13日、2年D組が取り組んだ授業、資料は「私の目をみて！」という作品だった。この作品は、同和地区の子どもにとって非常に重たいものを残していった。今まで表面的なあまり深くこのことを追求しなかった学習がまかり通っていく状況があった。しかし、「私の目をみて！」の学習というのは非常に重いものを生徒たちに与えていった。この第4回目の全体学習での公開授業に取り組む2年D組にいたK子という生徒が、担任の先生に自分の揺れる思いをぶつけた手紙を提出した。その手紙は私たち教師集団に大きな衝撃を与えた。

「私、すごく同和問題の授業をしているときが一番つらい思いをします。クラスの全員が私の方を見ているような気がします。また、思うことなんだけど、みんなの心の中では『部落出身でなくてよかった。』とっていると思います。私だって中学一年のときは他人ごとのように思っていました。でも、いざ自分だったと気づいたときとても悲しかった。そして、とてもつらくて心の中では、これから隠していこうとさえ思いました。これが差別心なんですよ。私みたいに考えている子がいるから差別がなくならないんです。」

私はこの手紙の文面が、私の心の重くのしかかった状態で、この日の全体学習に入っていた。2年D組の公開授業、K子は資料「私の目をみて！」に寄せて、健気にも繰り返し繰り返し発言をしていく。何とも言えない思いの中で、私はK子を見つめていた。そして、次の時間、学年全体で同和問題に寄せる思いを深めていく授業、全体授業に入った。友だちの本音の部分が次から次に語られていく。その最後のところでK子が手を挙げた。その授業を担当していた私はK子を指名した。K子は何かを言おうとする。しかし、一言口にして後、全く言葉を失った。

「ほんなこと言ったら怒られるかもしれない……」その後の言葉は全く言葉にならない。言葉がでない。涙があふれてくる。やりきれない思いで私はK子の姿をじっと見つめていた。

「私は差別があると先生から教えられた。……」そして、「それは先生たちが……」の後、全く言葉にならん中で、「部落出身……」ということもポツツとつぶやく。K子の涙でその授業は終わった。私はたまらない気持ちで2年生全体の子どもたちの前に立っていた。185名の生徒の前に立っていた。そして、私は必死に言葉をつないだ。

《先生に言わせてくれるか。Iさんがさっき言ってくれたし、今のKさんの心の声がどれだけみんなに届いているか。本当の仲間になっていく、そんな部落問題の勉強をしていきたいと思う。人間は、人のこと、遠くのことに対しては美しくいられる。美しい言葉を吐くこともできる。でも、近くの出来事や自分自身の問題になってくると、あれほど美しかった人が、あれほど美しい言葉を吐いた人が、見事に差別者になっていき、みにくさをさらけ出していく。そんな悲しい現実がいっぱいある。私たちはそれぞれが持っている本当の思いを出し合える集団でありたいし、関係でありたいし、教室でありたいし、学年でありたい。その思いをお互いが大事にし合いながら、共に励まし、支え合いながら生きていく絆で結ばれたい。この問題を自分自身の生き方の問題としてとらえ、許さない、許せないんだという生き方をこれからも勉強していきたいとします。涙を流すものがない、本当に今日も学校へきてよかったと思える教室でありたいし、関係でありたいし、学年でありたい。そのために、自分はこの問題にかかわってどう生きるのかという中で、この同和問題の学習をみんなで深めていけたらと思うんです。1月にE組が頑張って授業をしてくれます。みんなで本当の同和問題の学習ができたらなあと思います。》

私は精一杯の思いをつないだ。私は、そのとき本当に思った。私が一番しんどいところに立たないで、どうしてK子を始めとする部落問題の中で揺れている生徒が頑張っていけるかということ……。私がしんどいところに立たないで、私が心の底にある本当の思いを子どもたちに語っていかないで、どうして部落差別の中で揺れている生徒たちが、頑張っていけるだろうかということ……を私は思った。

そして、私はその翌日、教師になって初めてまる1時間、部落出身である自分の本当の思いを語った。今まで私が部落出身の教師であるということは、授業のある場面で語ったことはあった。しかし、まるまる1時間このことを語ったのは初めてだった。中学校のときに初めて部落出身であることを知った自分……。また、揺れ続けて故郷をすてることばかりを考えた高校の頃、そんな思いの中で過ごした京都での大学時代。教師になって頑張ろうとしたけど頑張りがきれなかった思い。そんな思いを生徒たちにつけていく。それが私の目覚めであったし、自分を解放していくスタートであったような気がする。1990年12月13日の授業の翌日、まるまる1時間生徒たちに部落出身である私の生き方を語った12月14日の授業は、私自身が開眼した大切な授業の記録として私の心の中に生き続けている。そして、その授業から私の同和教育の取り組みは全く違うものになっていく。

学年が2年から3年に上がりクラス替えがあり、今度は3年B組というクラスで生徒を担当する。その生徒のほとんどが、新しく担任する生徒であったのに全体学習という取り組みを通して、学年全体で同和問題について話し合っているからクラス替えがあっても、4月当初の学級開きの日から同和問題について切々と思いが語っていける。本当の思いを語っていける。本当につながっていける学習が続けられていく。全体学習の成果というのはここにあるんだなあということを実感しながら4月からの同和問題学習に取り組んだ。

そのとき今までの取り組みと最も違う形で取り組まれたのは家庭訪問であった。今まで、あまり4月当初の家庭訪問で同和問題を語ることはしなかった。しかし、その年からこのことを語らないで、このことを語り合うこと抜きに親や生徒との本当の出会いやつながりは存在しないと考えようになった。家庭訪問で同和問題を語る。それは私を語ることであり、私の生き方そのものを伝えることであった。その家庭訪問を通して、私は様々な思いを同和地区の保護者や同和地区外の保護者から聞かせていただくことができた。人間は語るから語ってくれる。本当のことを

語るから本当のことを語ってくれるということを実感する。その家庭訪問は、いろんな形で思いを返していただいた衝撃的な今もその場面が昨日のこのように思い出される家庭訪問の連続であった。同和地区のおじいちゃんは私の思いに応じて絞り出すように話をしてくれた。

《先生、私は9人兄弟の3人目に生まれた。家は貧しかった。小学校2年からは一切学校に行っていない。字を知らない。全く書けない読めない状態で、誰も教えてくれる人はいなかった。そんな中であつても一人で学び、字が読めるようになってきた。そして、会社を退職してからは、今まで字が書けなくて字を書かなかつた分、今一生懸命書き物をしている。そんなに長い時間同じ姿勢で書き物なんかするから、肩もこつてくるし腰も痛くなる。そんなことしなくてもいいのとおばあさんは言うてくれるが、このことは私に課せられた私が生きていく試練だと思って書き続けている。》

また、私の思いを聞く中で、涙をこぼされるお母さんもいる。部落は重い。その傍らで一生懸命、娘がこぶしを握って耐えている。翌日その生徒がこう生活記録を綴ってきた。

《家庭訪問の日、母は泣いた。この涙は部落のものにしかわからない。母は先生の話の中で、心の中にこみ上げてくるものがあつたのだろう。自分はそのとき、「耐えろ。何で泣くんや、くやしいんか」って心の中で叫んでいた。自分までも涙をこらえるのに必死になっていた。しみりぬった話の中、私は母につらい思いをさせる差別をたまらなく憎んだ。泣いてたまるか、差別に負けない人間になるぞ。弱い心よさようなら、強い心よこんにちは。》

同和問題を語り合うことによって私は子どもたちにつながっていった。そんな思いがする。

しかし、本当に辛い場面もあつた。中学校の3年、しかも、家庭訪問という特別な場面で初めて自分が部落出身であることを知った生徒が二人いた。小学校のときもずっと学習会に参加していたはずなのに、学級の同和問題学習でも、また全体学習の中でも「差別をなくすために頑張っています。」と発言してきたのに、自分の立場を認識していなかった。私はその二人の生徒を通して、社会的立場の自覚というのは、小学校の5年か6年で多くの仲間と共にしっかりとさせてやりたいと思った。一人はA子だった。溢れ出る涙に私は本当にたまらん思いで、その子をただただ見つめるだけだった。あのときは最高につらかった。私はA子を2年生のときも担任していたのに、A子の生きる力となる学習にはなっていなかった。その日のことを私は生活記録、私の教育記録にこう記している。

《昨年度2年B組で同和問題学習に取り組む中、同和問題に対する憤りは育っていった。しかし、自分にとって同和問題が何であるかという学習、社会的立場の自覚をさせていなかったため、中学3年の家庭訪問で初めて自分の立場を自覚した。部落差別は許せないと、すばらしい生き方をつかんでいくんだと思っていたA子であったが、涙がとめどなく流れてきた。あの涙を怒りの涙、人間としてのあり方を求めていく熱い涙に変えていく営み、それがこの1年の営みである。》

もう一人はB夫である。B夫のことも私はこう綴っている。

《B夫も家庭訪問の日までは自分が対象地区生徒であるとは夢にも思っていなかった。私の言葉で自分が対象地区の生徒であることを知ったB夫は、涙こそ流さなかったが、目はうつろになりその瞳は焦点を失っていた。私の「つらいか。」という問いに、一生懸命首を横に振って見せるが、今まで滑らかにいろんな思いを話していた口は固く閉ざされてしまった。今まで全体学習で発言してきた思いは何だったのか。部落の仲間と共に頑張っていくと多くの仲間と思いを交わし合ったのに、自分がその部落の人間であると知ったとたんに言葉を失い、何かに絶望したように動揺していく。今まで生徒たちに生きる力をつけていく同和問題学習をやっていくんだと言い続

け、実践してきたことは何だったのか。B夫の動揺し悲しみの色を隠せないうつろな目は、「先生、助けてください。」と訴えているようだった。》

本当に厳しい現実がある。なかなか子どもたちの確かな生き方になっていく同和教育ができていかない。私は心の底から子どもたちが本当に立ち上がり、つながり頑張っていく学習にしていきたいと思った。そんな思いの中で取り組みがスタートした。

その生徒たちが同和問題学習の中で立ち上がっていく大きくきっかけとなった授業の様子を見ていただきたい。それは6月25日に実施された板野郡同和教育研究大会の公開授業だった。その公開授業に私は「ふるさと」の詩に寄せて、丸岡忠雄さんが講演された記録「同和教育への希い」を選んだ。そのビデオを最初に見ていただきたい。その中で思いを語るA子の姿、B夫の姿を通して、この学習の意味を考えていただきたい。

※

【授業記録】

1991年度板野郡同和教育研究大会（公開授業）

主 題 「誇りうる生き方を求めて」 1991年6月25日（火）
資料「同和教育への希い」丸岡忠雄 板野中学校3年B組

T₁：丸岡さんの資料をみんなで勉強してきたわけですけど、今日は丸岡さんの生きざま、生き方に寄せるみんなの思いを語り合いながら、私たちの生き方、あり方を考えていきたいと思えます。非常に蒸し暑い中ですけど、みんなの思いがふくらんでいく1時間にしたいと思えます。

T₂：丸岡さんは部落問題を学ぶことによって、「かつて部落に生まれたことを恥ずかしいと思っていた。そのことが恥ずかしいと思うようになった」と言われています。その丸岡さんの思いについて、みんながこの学習の中から思うことを発表してもらいたいと思えます。

SN（女）：部落がどのような理由でできたのか。今までどうして差別され続けているのか。しっかりと学習する機会がなかったからだと思います。私たちは今、学校で部落差別について学習しているけど、昔は学習する雰囲気でなかったからだと思います。

MM（男）：丸岡さんが部落に生まれたことを恥ずかしいと思ったのは、やはりまわりに負けてしまいそうな差別があったからだと思います。部落問題を学ぶことによって丸岡さんは本当の自分の生き方というものを見つけ出すことができ、恥ずかしいと思うことが恥ずかしいことだと、丸岡さんは気づいて、自分の間違いを正していくことができる人になったからすばらしいと思えます。

YI（女）：私はどうして部落に生まれたことが恥ずかしいのかわからないんですけど、やはり差別があるから恥ずかしいと思込まされているんだと思うんです。もしかしたら、私も板野に生まれたことが恥ずかしいと思うようになるかもしれないけど、板野には、私を一生懸命育ててくれたおじいちゃんやおばあちゃんがいて、一生懸命頑張ってくれているおじさんやおばさんのいることを忘れないように、今この勉強を真剣に進めていきたいと思えます。

T₃：今、3人が語ってくれたけど、付け加えて発表してください。

HI（男）やっぱりまわりの環境が、部落に生まれたことを恥ずかしいように思わせていたんだと思えます。それで、親とかも仕方なしに子どもの幸せを願うならという感じで恥ずかしいことだから、世間に出さないように、かくすように教えていったんだと思えます。

T₄：差別が恥ずかしいと思わせていったということ。

SE（女）：部落の人たちはまわりの環境によって、部落は恥ずかしいという感じを植え付けられていったんだと思います。それで、結局、差別はいけないとわかってても、部落を恥ずかしいと思うことは、自分に差別心があるということだと思っから、差別がいけないということがわかって、差別心を持っている自分に気づいて、恥ずかしがるのが恥ずかしいことだと思っようになったんだと思います。

T₅：自分自身の中に差別心があったという発言についてどうだろうか。

YO（男）：部落に生まれたことが恥ずかしいって思っようにしていったのは、まわりの人だと思っます。小さい頃はそんなことを知らなかつたし、そんな恥ずかしいという思っはなかつたのだから、まわりの人によって思っさせられてきたと思っます。

YI（女）：私もSEさんが言ったように、自分が部落に生まれたことを恥ずかしいと思っるのは、自分の差別心があるということだ、部落ということを侮辱しているから恥ずかしいと思っんだと思っました。

T₆：今のSEさん、YIさんの発言についてどう思っますか。

SN（女）：私も同じような意見なんだけど、自分が部落出身と聞いた時や部落出身でないと聞いた時に、ほっとしたりすごく悲しくなったりするのは、やはり自分の中に差別心があるからだと思っます。安心するのはやはり差別心があつて、もし自分が部落だつたらと考え、悲しみを背負った人の立場に立つことができないことだと思っます。また、悲しくなつて涙が出てくるのは、自分が差別するのはいけないと頭でわかつていても、そのようになつてしまっうのは、やはり差別心があるからだと思っます。

MM（男）：SNさんの意見について同じみたいだけど付け加えます。部落と聞いってなんか重苦しくなるのは、いくら勉強していてもあるし、やはりその時は差別心がむき出しになつていっようにぼくは思っます。今までに何度か学習してきてけど、真剣に取り組んでいっるといっるのは中学校2年になつてからで、真剣に取り組むことによつて、部落に生まれたといっことが恥ずかしいことではないんだと学習によつて段々とわかつてきました。最初、部落に生



まれたといっことがわかつたとき、大きなショックがあつて、そのショックが自分の中にある差別心からきていっると今までの学習の中からわかつてきたけど、まだまだ自分の中から差別心が出てくることだと思っます。

YI（女）：それじゃあ、MM君は今、自分をどう思っっているんですか。

MM（男）：今はやっぱりまわりに仲間がいっるし、本音で打ち明けられることのできる仲間をつくつていきたいと思っているから、自分をさらけ出すことによつてもっともつと仲間を増やしていっくことができると信じていっます。

T₇：MM君の意見についてどうだろうか。

TF（男）：MM君は自分の考えをさらけ出して、友だちとかが変わった目で見たらどうしまっす

か。

MM (男) : その時は実際に変わったようでも、本当のことを語っていくことによって、日がたつにつれてより深い仲間というものができてきたように、今は思えるようになってきました。

YI (女) : TF君に言いたいんだけど、本当のことを言って見る目が変わる友だちはそれまでだし、本当のことをわかろうとしてくれる人でなければ友だちとは言えないと思うし、本当の友だちをつくるためにも、自分が部落出身であることを言ってしまった方が、私はいいと思います。

MM (男) : TF君にぼくが公開授業で部落出身と言った時に、友だちの目が変わったような気がすると相談したことがあったんだけど、そのことを気にかけてくれていると思うんです。その時は変わったような気がしたし、実際にも変わったように思うんだけど、今は段々その友だちとも、心をわかり合うことができるようになってきたと思うんです。やっぱり自分をさらけ出したら、相手の心も開いてくれると思うし、今は心のつかえがなくなって、みんなに部落出身であることを言ってよかったと思います。

TF (男) : MM君からまわりの目が変わったように思うと聞いた時には、ぼくもびっくりしたし、まさかMM君みたいに堂々と語れる子が、気にしているとは思ってもいなかったし、こんなに部落問題の勉強をしてきたのになんでかなあと思ったんです。まじめに頑張っているけど不安になる子ができるし、丸岡さんたちのようにみんなが「恥ずかしがることではない」という思いをしっかりとつかんでいかないかんと思います。

T。 : TF君やMM君の思いに寄せて語ってみてください。

SE (女) : MM君の意見についてなんだけど、自分が部落出身だと言って差別するような仲間だったら、前も言ったけど、結局そんな友だちだったら、最初からつくらん方がいいと思います。部落と言っても、同じように頑張ってくれたり、仲よくしていくことのできる友だちをつくるのが大切だと思います。私は本当のことを言って離れていく友だちを10人つくるよりは、本当の思いがわかり合える友だちが一人いた方がすばらしいと思います。

SN (女) : MM君が部落に生まれたことを訴えることができたのは、やっぱり信頼できる人がいたからちゃんと言えたんだと思いました。それなのに、部落だと聞いて、どうしてもその人の見方が変わる人は、その人に勉強不足のところがあったり、差別心もあったと思うけど、その人もその人なりに自分の中にある差別心とたたかっていたのではないだろうかと思いました。

T。 : 次のところを考えていきます。「部落の子が非行に走る、手におえなくなる。その時にその子の裏側、差別の中に置かれている差別の実態を知って、その子の身になって考えていかなければならない」と丸岡さんは資料の中で訴えています。丸岡さんが部落問題の学習の中から、子どもの裏側、差別の実態まで、その身になって考えていかなければならないと感じていったことについて、みんなの思いを発表してみてください。

KH (男) : 差別のこと、部落に生まれたことなど、友だちの一番つらい部分を言ってくれる。ぼくはそんな友だちと本当の友だちになりたいと思います。口先だけでなく、その苦しみを自分のことのように感じていくことのできる仲間になっていかなければならないと思います。

MM (男) : 今まで学習してきた資料の中にあつたと思うけど、地区外の子が悪いことをして非行に走っても、その子やその家だけの問題になっていくけど、部落の人が一人悪いことをしたら、部落全体を差別していくような社会があると思うんです。それは社会全体にまだまだ

部落問題の学習が十分でないからそうになってしまうと思うんです。実際にぼく自身もこの学習に真剣に取り組み出したのは中学2年からだけど、差別する人には以前のぼくたちと同じように本当の学習がなされていないから平気で人を差別していく人間になってしまっていると思うんです。ぼくはしっかりとした部落問題の学習をしていくことによって、自分自身の中にある差別心が段々と見えてきて正していくことができるようになるけど、しっかりとした学習がなかったら、自分の差別心は段々と大きくなっていくと思います。

Y I (女) : 私も非行に走る裏側までわかっていくことが必要だと思います。表面で説教するのは簡単だけど、そこからは何も生まれてこないように思います。だけど、今の私の本当の気持ちは、どうして部落に生まれたということだけで、非行に走っていくのかはちょっとわかりません。やっぱりそんな考え方はあかんのだろうけど、自分の本音を言ってみました。

S N (女) : MM君の話にもどるんだけど、私も、MM君が言ったように、部落外の人が悪いことをしても、その子一人だけが悪いというんだけど、部落の中のだれか一人が悪いことをしたら、ああやっぱり部落は悪いという感じで、部落全員を悪いというように見ていってしまうところがあると思います。部落にも、部落外の人にも、どちらにもいい人がいて一生懸命頑張っている人がいるのに、どうしてそんな見方しかできないんだろうかなあって、すごく



恥ずかしくなることがあるんだけど、この勉強をしていくうちにこんな考え方は間違っているなあと言うことがわかって、前までは部落差別はなくならんと思ってたけど、みんなでの授業に頑張っていくうちになくなるんだという気持ちに変わってきました。

H I (男) : さっきから気持ちがごちゃごちゃになって、何を言ったらいいのかわからないところがあるんだけど、やっぱり非行に走る子は意志が弱かったんだと思います。差別と共に闘っていく友だちがいなくて、負けてしまったところもあると思うけど、差別に負けて非行に走るというのは、自分が部落出身だということで涙を流すということにつながっていると思います。

S N (女) : この勉強をし始めて、家族でもよく話し合うようになったんだけど、部落の子が非行に走るということを前に家族で話し合った時に、部落の子が自分が部落とわかった時に3通りの道があるということをおとうさんが言ったんです。3通りの道というのは、一つは部落ということをやっとかくし通して、いつばれるかわからないという感じでひやひやしながら生きていく道と、それとももうどうなってもいいわという感じで開き直って悪いことをしたりする道と、もう一つが、差別は間違っているということを訴えて部落解放に向けて生きていく道の3通りに分かれると言ったけど、部落解放に向けて一生懸命取り組んでいく人の方がすばらしいなあとと思います。

Y I (女) : 私もS Nさんと同じ意見で、部落に生まれたということをつらがるんでなくて、反対にそのことをバネとして差別されるということに怒って頑張っていかなあかんと思います。

MM (男) : だけど、実際に学習したからわかってきたようなもので学習がなかったら、自分も部落解放の道には進まなかったと思います。

YI (女) : そしたら、MM君は悪いことをするんですか。悪いことをしたらその分だけ、部落が悪いように見られるんと違うんですか。

SN (女) : 二人の言いたいことすごいわかるんだけど、やっぱりMM君が言うように学習がいると思うんです。私もこの学習がなかったら、間違った考え方でずっといたかもしれないし、部落の人が悪いことをすれば、また部落じゃという感じでどんどん差別されていくというのはわかるけど、私たちが今、一生懸命勉強しているんな人に授業なんかを見にきてもらって、見にきた人たちに私たちの気持ちを訴えることによって、見にきた人たちが家に帰っているんな話をして、どんどん私たちの気持ちが広がっていけば差別はなくなると思います。

MM (男) : さっきSNさんが3通りの意見を言っていたけど、今、自分が進んでいるのは部落解放への道だと思うけど、もし学習がなかったら、まあぼくは非行の道へはいかなかったと思うけど、かくし通していたと思います。

T₁₀ : 丸岡さんもそうでなかったらどうか。丸岡さんがふるさとの詩を書き、またさまざまな部落を語る、差別をなくすための詩を書くようになった。それは差別をなくすための学習があったからだと言う。そして、信じ合い、何でも話し合える仲間がいたから、堂々と差別解消に向けて自分をぶつけていくことができたと言われる。信じ合い、何でも話し合える仲間、これはみんなを見ていてしみじみ思うことです。この丸岡さんの思いに寄せてみんなが思うこと、感じることを語り合しましょう。

JK (女) : 私は3年生になるまでは、自分が部落出身であることを絶対かくしていこうと思っていました。でも、いろいろな資料を勉強し、みんなの意見を聞いて、その言っていることを本当だと信じたとき、この仲間だったら私の一番つらい思いを打ち明けられることができると思うようになってきました。今、私は二人の友だちに自分が部落出身だということを打ち明けています。まだ二人しか本当の友だちはいないけど、これからはもっとたくさん本当の仲間を増やしていきたいです。

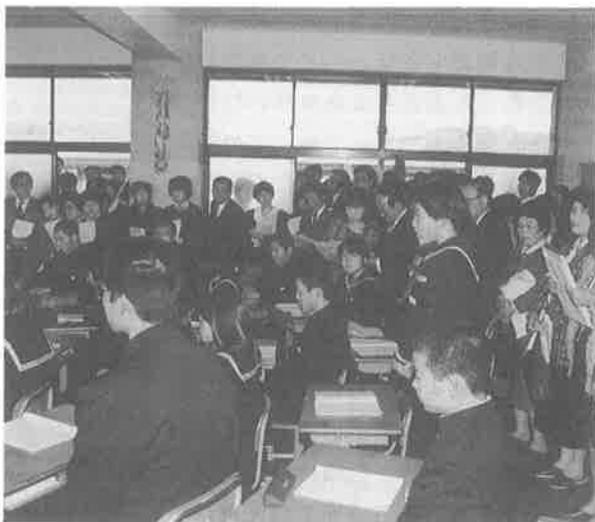
T₁₁ : JKさんの思いを受けとめてほしいと思う。

YI (女) : 私もJKさんにそのことを打ち明けてもらったんだけど、自分の一番苦しい部分を打ち明けてくれたんだから、私も心を開いて頑張っていけないかなと思うようになってきました。今、まだ二人にしか言えなかったかもしれないけど、もっとクラスの中の人たちがJKさんの気持ちを受けとめて、みんな今の時間を大切にしてほしいと思います。

MS (女) : 今、3年生でも、何人かの人が、自分が部落出身ということを全体学習なんかで言ったんだけど、今、JKさんが二人だけと言ったけど、ここにいる3Bのみんなの前や多くの先生方の前で言えたんだから、信じてくれたと思いたいです。私も部落に生まれたんだけど、恥ずかしいと思ったこと一度も……なかったけど……ほなげど言うて差別されたらいやじゃと思うてずっと言えなかったけど、このクラスの子だったら、信じてくれるからこのことが言える。

SE (女) : JKさんとMSさんが言ってくれたけど、これから今日打ち明けたことを後悔するようだったら、私やはいったい今まで何をしてきたんなと思ってくれていいと思います。私も部落ということ言うた子を変な目で見ようなんて一つも思うてないし、見たらごっつい自分があほらしいなってくると思います。それで、この前読んだ本で心に残っていることな

んだけど、一応世間で言う親友とは、親しい友と書いて何でも話し合える友だちということだけど、本当の親友とは、心の友と書いて自分の恥ずかしいところでも、何から何まで端から端まで話し合える友だちを心友というそうです。私もそんな心友をたくさんつくりたいです。



TK (女) : 私も部落出身ですが、このクラスのみんなだったらこのことが言えると思います。この前友だちに自分が部落出身ということを打ち明けたら……「ほんなん関係ないでえ」

と言ってくれました……。私は本当の友だちがいたんだということがわかったのでよかったですなあと思いました。

KK (女) : 私はさっきTKさんの学習プリントを見せてもらったんだけど、最初見せてと言ったとき、いやじゃと言っていたけど、KKさんだったら信頼できるけんていうて見せてくれたんです。私やが信頼できる友だちになっていかないかんと思います。

T₁₂ : みんな二人の発言をどう聞いたですか。

MO (女) : 私もTKさんに打ち明けてもらったんだけど……。

T₁₃ : TKさんの分もがんばらな。

MO (女) : 信頼してくれていると言ってくれたんだけど、まだまだ力になれていない……。もっと勉強して、TKさんの力になっていくことのできる人間になりたいです。

KU (男) : まだ発表もできないですと座っているだけなのに、みんな信じてくれて発表してくれるのに、自分はこんなことしよっていいんだろうか。このクラスの子を信じて発表してくれるのにこんなことしよっていいのかと思いました。

SN (女) : 私はちょっと前に、まだこの勉強をし始めて少ししかたっていない時に、ある友だちから部落出身じゃということを打ち明けられて、なんとなくわかつたんだけど、本人から聞いてその子泣いていたし、ショックだつて、夜とかあまり眠れなかったんだけど、そのことを打ち明けて涙を流している子を見たら、腹が立ってきてこういうふうにもその子をここまで追いやる差別を許せないと思います。

KT (女) : 私も部落出身ですけど、泣いている子を見たら泣いてほしくありません。そして、その泣いている外側だけ見てほしくありません。悲しみが深いから涙が出てきて止まらないんだけど、この悲しみや苦しみがわかっている友だちがこのクラスにいっぱいいるし……。本当は今、泣きたいんだけど、涙をこらえています。

MM (男) : やっぱり自分から心を開くことによって友だちも心開いてくれるということが、今、本当にわかってきたと思います。心を開くことにより信じ合う友ができ、お互いに本音で思いをぶつけ合うことができると思います。お互いに涙が出るというのは、涙を流す友だちの気持ちはわからないことはないけど、これからの学習によって涙は出てこなくなると思います。実際にぼくもこのクラスでは、信頼している友はたくさんいるし、全体的にも友だちは

たくさんいる方だったけど、表面的な友だちがほとんどで本当に信じ合った友だちはあまりいなかったと思うんです。でも、この学習によって、信じ合える友だちがぼく自身の中で増えていったと思います。自分から心を開くことによって、まわりの人も心を開いてくれたことが本当にうれしいです。心開いてもまわりに反応がないんだったら、少しもおもしろくないと思います。この頃、公開授業や



全体学習のある場面で口先だけでいい意見を言ったって、公開授業や全体学習の別の場面で寝ていたりする子が目に入ったら、とても腹が立ってめつたに怒らんつもりなんだけど、自分でも押さえきれんぐらい腹が立つ時があるんです。でも、押さえないかんとって押さええています。みんなも頑張っしてほしいと思います。

H I (男) : ぼくも部落の人間です。今までこのクラスにもそのことをわかってくれる友だちはいないと思っていたけど、「みんないいなあ」と思いました。森口先生に家庭訪問の時に「お前は部落の人間だ」と言われたとき、自分には差別心がないと思っていたけど、実際にありました。それで、この授業では泣かないと思っていたけど泣いてしまいました。これからこれをバネとして部落解放の道に進んでいって、気軽に部落の人間と言えるような社会をつくっていきたいです。

S E (女) : みんな泣きながら語ってくれているのに、涙が出てこん自分に腹が立つんだけど、心の中は泣きたい気持ちでいっぱいです。話は最初にもどるけど、M OさんがさっきT Kさんの力になれないと言ったけど、みんな部落出身だと打ち明けた後も、いつも通り接していくことじたいが、その子の力になって一緒に闘っている証拠だと思います。

Y I (女) : 私もM Oさんの意見についてだけど、私も、M OさんはT Kさんの力になれていないと言っていたけど、ここで手を挙げて発表することがその人を支えていくことなんだと思います。今日一度も発表していない人がいると思うけど、ここで座ってお客さんのまま終わったら、みんながこうやって心を開いてくれているのに、その人の気持ちを踏みにじることになっていくと思います。絶対一度は発表してどんなことでもいいけど、その人の思いに応えてください。

K O (女) : みんなの前で涙を流して発表している子を見ていたら、涙を出したいんだけど、心の中で泣いているけど、涙が出てこないという感じです。授業を今のうちにやっておかなければ、その人たちを自殺に追いやるかもしれないから、今のうちにみんな心を開いて、この学習を頑張っていかなければいけないと思いました。

M M (男) : ぼく自身、あまり人の涙を見るのはいやなんだけど、人の涙によって、自分の心の中になんか突き刺さって行って、これからの発表とかのエネルギーになるものがいっぱい生まれているように思います。涙を流してまで言ってくれるのはうれしくて、ぼく自身も泣きたい気持ちになっているし、みんなも涙を流して語ってくれる仲間の思いが心の中に突き刺

さっていると思うから、どんなことでもいいから、まわりの人に、その思いをどう受けとめたか発表してもらいたいと思います。

S N (女) : みんなこんなに一生懸命になって発表しているのに、どうして下を向いていられるのかと思います。信頼されているんだから、何か言いたいという気持ちはみんなあるんだと思うけど、信頼してくれている人に何でもいいから応えてほしいです。

M T (男) : みんながぼくらのことを信じて真剣に発表してくれるのに、ぼくはその思いにあまり応えられていないので、これからは手を挙げて堂々と発表できるように頑張りたいと思います。

K K (女) : Y I さんや S N さんの意見に付け足すようになると思うんだけど、一回も発表していない人は、みんなが泣きながら訴えているのに何も感じないんですか。何か思っているんだったら、手を挙げて発表してください。

R H (男) : ぼくは親から部落のことを聞かされて、中学校に入る前は部落というのがすごく恐かったんだけど、中学校に入って部落の友だちができたんだけど、みんないいやつばかりで、ほんまに部落差別を壊さないかなあと思いました。

K M (男) : ぼくは今までほとんど自分のことばかり考えていて、友だちが部落だといってもあまり真剣に考えていませんでした。今日の授業でもみんな泣きながら自分のことをどんどん言っているのに、支えることのできない自分がすごく情けないです。今回の発表をバネとして、みんなに応えられる人間になるように、これからの授業でどんどん発表して信頼し合える仲間をつくりたいと思います。

H M (男) : 今まで発表してくれた子は、ぼくや他の子を信じて発表してくれたのに、今までぼくは心が重苦しくなって発表できなかったのも、この授業を土台として部落差別を壊して重苦しくない社会をつくっていく一人になりたいと思います。

M I (女) : 今まで自分のことを打ち明けてくれた人に対して、ずっと私はうつむいてばかりいたんだけど、今まで学習してきた本当に自分自身の心から自分の一番つらいことを言えるのは、まわりが信頼できるということで、S N さんがさっき言っていたけど、みんな信頼されていると言ってくれて、私も信頼されているのかなあと思っていて、だけどどんどん発表できないというのは、自分の心の中にまだまだ差別心があるからだと思います。これからもこの差別心と闘って発表していきたいと思います。

S F (女) : 私もあまり人の涙は見たくないんだけど、私だって、中1のときは泣きたかったし、今までだって我慢してきたし……、差別っていうのはつらいから……、中1のときに味わった思いはもう二度と味わいたくない。差別に苦しむ人の姿も見たくない。みんながそんな苦しみを味わうことのないように頑張って勉強していきたいと思います。

K N (男) : みんなは信頼してくれているけど、ぼくにはまだ信頼される程の方はないと思います。みんなに信頼されている限りは、みんなの期待を裏切らないように差別をなくすために頑張りたいです。

T₁₄ : 時間がきました。最後に委員長まとめてくれるか。丸岡さんとは、みんなにとって何であるのか。丸岡さんの生きざま、生き方を学習してきたことは何であったのか。

Y I (女) : 先生にとって丸岡さんとか、みんなにとって丸岡さんとかは、すごい人かもしれないけど、私にとって丸岡さんというのはただのおじさんです。私の丸岡さんは、みんなであり、先生であり、みんなの丸岡さんは、みんなであり、先生であり、みんなが悲しむことに

より私も悲しくなり、みんなが頑張ることにより、私も頑張らないかんと思う。私の一番中心はみんなです。この勉強をするにあたって絶対みんなを泣かしたくないと思います。みんなが笑ってちゃんとやっていけるようになるまで、ほんまにみんな頑張っていかなあかんと思います。みんな頑張りましょう。

T₁₅ : 終わります。

※

《ぼくも部落の人間です。今までこのクラスにもそのことをわかってくれる友だちはいないと思っていたけど、「みんないいなあ」と思いました。森口先生に家庭訪問の時に「お前は部落の人間だ」と言われたとき、自分には差別心がないと思っていたけど、実際にありました。それで、この授業では泣かないと思っていたけど泣いてしまいました。これからこれをバネとして部落解放の道に進んでいって、気軽に部落の人間と言えるような社会をつくっていきたいです。》

このB夫の発言は心につき刺さった。なかなか自らを明らかにできない状況、本心を語れない状況がある。たとえば、教師になっても、その職場で職員室という最も民主的な、部落解放という目的を持った仲間が集まっている職場においても、そのことがなかなか語れない状況がある。部落差別が渦巻く中へ彼等は飛び込んでいく。その中で人間としてどう生きるかどう生きていくのか、自らのあり方を見つめながら、部落差別に怒り、部落差別をなくしていくという生き方をしている。B夫は、この先日、7月21日に行なわれました県の奨学生集会、解放奨学生の集会で開会行事の中で堂々と水平社宣言を朗読した。まさしく部落差別をなくしていく生き方を、彼はこれからの人生においてつかんでいこうとしている。頑張っていこうとしている。もう一人はA子、彼女の発言は、涙でいっぱいになったけど、彼女を私は決して忘れない。A子はこう語った。《私も部落出身ですが、このクラスのみんなだったらこのことが言えると思います。この前友だちに自分が部落出身ということを打ち明けたら……「ほんなん関係ないでえ」と言ってくれました……。私は本当の友だちがいたんだということがわかったのでよかったなあと思いました。》

彼女は後にこんなことを私に語った。

「自分が部落って分かったときに、〇〇ちゃんも〇〇ちゃんも部落でないのに、なんで私だけ部落になるのと思って、お父ちゃんやお母ちゃんの顔、本当に見とうないって思うた時期あった。」

A子はその授業の中で、全く違う生き方をつかんでいった。A子が翌日に記してきた生活記録は、私の大きな宝物となっている。彼女はこう綴った。

《私は今日の発言で部落のことが恥ずかしくなくなりました。もう何のこだわりもありません。発表している時は自分で何を言っているのかわからず、涙が出てきたけれど、SさんやJさんが発表したのに、私だけ黙っていてもいけないなあと思っていたんです。そしたら、自然と手が拳がったのが不思議でした。心臓はドッキンドッキンと破裂しそうだったけど。私の発言の後、Kさん、Oさんたちが言ってくれて、ほっとして発表してよかったなあと思いました。泣くのは今日で終わりにします。M君とか、Tさんとかも他人の涙は見たくないと言っていたし。今日の授業で私は多くの人に支えられているなあと実感しました。みんな信じ合える仲間です。板野に生まれたこと、部落に生まれたこと、まだまだ不安とかがあるけど、私は強い人間になりたいです。「歎くより怒ることだ」を胸にきざんで。今日で新しい道が開けたような気がします。今まで「学習会の通知やもらいたあない」と歎いていた自分がばからしくなりました。これからも学習会に参加していきたいし、どんどん学習していきたいです。いつか絶対絶対差別がなくなっていると思います。何か、楽しみです。とにかく、今日の授業、忘れられない一日になりそうです。

うれしかった。よかった。ビデオ貸してください。》

最後の書いてあった「ビデオ貸してください」という言葉、私はA子に言いました。「泣いたところ見たいか」って、そうしたら彼女ははっきりと「見たい」って答えた。

1学期の三者面談のときに母親はこう話してくれた。

「Aちゃんの声、聞こえんもん。でも、先生、この子が発表している姿、何回も何回も先生見たんですよ。」

そしてこうも話される。

「この子にとって、あの家庭訪問は重かったけど大きかった。」

私はこの生徒たちと絶対つながっていく。そして、闘い抜く。本当に差別をなくしていく生き方をこの子たちと絶対やっていくんだということを思い持って、すべての教育活動に自分のすべてをぶつけて頑張っていた。

その年、10月31日に行なわれる予定であった全日本中学校道德教育研究大会の特別公開授業の授業者に私がそのとき決定していた。富田中学校の体育館で、今見ていただいた生徒たちと授業を公開するということが決まっていた。私は最後の最後までどんな資料を使って授業をするかで迷い続けた。7月に全日本中学校道德教育研究会の理事会に参加した際に、夜遅くまで全日本中学校道德教育研究会の会長さんからいろんな意見をいただいた。しかし、授業するのは私なんだ。私のやりたい授業をやりたい資料をやらせてほしい。そんな思いがあった。私はこの大会で人権問題、差別問題を扱った資料を考えた。

しかし、道德教育の研究会の特別公開授業の場面では違う授業をしてほしい。違う形でやってほしいという様々な要望の中で、人権問題、差別問題を扱った資料を断念した。私の信念は通すことはできなかった。でも、私はそのおかげで、私の視野を大きく広げることができた。小松島中学校の大川先生のご指導のもと、私は「ナイン」（井上ひさし・作）という作品に出会うことができた。高校の現代文の教科書に載っている作品だった。差別問題、人権問題についての記述は全くなかった。もちろん同和問題に関する記述も全くない。その作品を資料とした授業を富田中学校での特別公開授業として実施することになった。主題は「生きる絆」であった。10月に入ってからクラス（3年B組）の生徒たちにその資料を配ったとき、ある生徒が私に抗議した。

「先生、なんで同和問題ずばりの資料をせんのですか。全国から多くの先生方が来るんでしょう。その先生たちに同和問題学習のすばらしさを伝えていくチャンスと違うんですか。」

本当に頼もしいうれしくてたまらない私への抗議であった。

「私は同和教育とは教育そのものだと思っている。富田ではこのナインで闘う。」

私はそれ以上の言葉は返さなかった。でも私はこの生徒たちとならどんな峠も乗り越えられるということを確認した。

10月31日、バスで富田中学校の体育館に行った。そのバスに乗り込んだらすぐ、生徒たちはカラオケを始めた。「川の流れのように」を歌う生徒、「涙のリクエスト」を歌う生徒、次から次へと歌声がバスの中に響きわたった。今から全国から集まった700人の先生方の前で授業を公開する緊張感など全くない。この生徒たちのエネルギーとは何だろうかと思った。バスはかちどき橋に差し掛かったとき、運転手さんが「先生もう着きますから、歌は終わってください」と言われた。そのとき、どうしても最後にみんなで歌いたい曲があると生徒たちが訴えてくる。最後ということで「トレイン・トレイン」を全員で歌った。富田中学校に届くような歌声であった。最後のクラス全員での大合唱して、非常に懐かしく思います。今思うと、あの子たちはどうして

ものしかかってくるプレッシャーを必死に仲間の歌声と共に打ち消し、そして、何のためにここに来たかの、何のために富田中学校で授業するかとゆうことを、生徒たちの中でしかりとらえようとしていたのだと思えてくる。バスを降りるとき運転手さんが言われた。「先生、音楽の会ですか。本当に頼もしいですね。」私は道德の会とは言えず「ありがとうございます」と言ってバスを降りた。

その授業は資料から全く予想もつかない展開になった。その授業のビデオを見ていただいて後の話をさせていただきたい。

※

第25回全日本中学校道德教育研究大会徳島大会 特別公開授業

1991年10月31日(木) 12時50分～

会場 徳島市富田中学校体育館

資料「ナイン」(井上ひさし作)

徳島県板野郡板野中学校

3年B組 授業者 森口 健司

主 題 生 き る 絆

T : 今日も生きるこの意味を求めて、みんなの思いや願いを語り合いたいと思います。最初に前の時間話し合ったことについて、前の時間の板書を見ながら振り返ってみたいと思います。

新野(男) 新道という街は、新道少年野球団があったことで活気づいてとても温かい街になったと思います。そしてその中で人々は、新道少年野球団を新道の象徴として新道にはなくてはならない存在だと思っていたと思います。

森川(男) 新道少年野球団は新道の誇りであり、象徴であったと思います。新道は変わってしまったけれど、ナインのみんなには変わってほしくないという思いが中村さんにはあって、昔の新道のような家族のつながりがいつまでもあってほしいんだろうと思いました。

川田(女) 新道少年野球団は、新道にとってすごく大きな存在であったと思います。中村さんにとっても昔の思い出を語る最高のチームだったと思います。

圓藤(女) 新道少年野球団に象徴されるみたいに、新道は華やかになったけれどその代わりに人と人とのつながりとか自信とか、そんなのがなくなったというのが1時間目の一番大きな印象です。

村山(男) 新道と新道少年野球団はお互いに支え合う関係があって、それで新道は自分の子どもたちが少年野球団にいたから、その新道の人たち全体のつながりがあっていろいろ結び付いていて、その新道について話すにはいつも新道少年野球団のことが出てきたりして、それで今は新道少年野球団の方は何か離れ離れになったけど、新道は何か商店街としてにぎやかになったものの人と人との関わりとか接触はなくなって、この新道は一つに家族だったけどその家族的な何か失われつつあると思います。

久保(男) 新道と新道少年野球団は本当につながっていて、だれからも愛される存在であってやっぱり何かで結ばれていたと思います。

井上(女) 前の時間勉強して新道と新道少年野球団というのは、同じようなものだったんと思います。新道の人たちが見せた人間と人間の絆というのがナインの見せた絆であって、新道が変わっていくと共にナインのみんなも変わっていったから、中村さんは昔の新道少年野球団を思い起こすことによって、昔のままの人間と人間のつながりのあった新道のままで変わら

ないでほしいと願ったんだと私は思いました。

T。中村さんの思いを通して、新道少年野球団や新道商店街について考えてきたわけですけど、この時間は陰をつくり合いながら最後まで決勝戦を戦い抜いた新道少年野球団のナインの気持ちについて話し合いたいと思います。(板書①)

稲井(女) 英夫が炎天下で12回を完投できたのは陰をつくってくれた正太郎のおかげだし、その周りで支えてくれたナイン一人一人の支えで12回まで完投できたんだと思います。

中山(女) 陰が一つもないところでの試合は本当につらかったと思います。ナインが陰をつくってくれた時にあまり暑さは変わらなかったかもしれないけれど、この英夫には何十倍も涼しく感じられたと思います。そして、そういうふうを支えられ励まして励まされてきた仲間とだったから、やっぱり最後まで頑張れたんだと思います。

漆原(男) もう6回まできたら、もう英夫もかなりバテていたと思うんです。そこへ正太郎の日陰がきて、やっぱりすごく驚いたと思うんです。正太郎自身はそんな友情とか、そんな関係なくて勝ちたい一心のところそういう考えができてきたと思うんです。でも他のナインから見たら、正太郎がすごくすばらしい人間に見えて、また自分たちナインの友情もあるんだなあというのを感じたと思います。

T。正太郎が日陰をつくったということにふれて、今発言がありましたけど、漆原君の発言につなげてほしいと思います。

井上(男) やっぱりみんなの言うようにこんな厳しい中で戦ったんだから、ナインの関係も深まっていったと思います。そして、あのパレードの時に泣いていたのは、やっぱり陰をつくり合うという関係が深まって悔しさよりもすごい嬉しさがあったと思うし、涙を流したのもその嬉しさがこみ上げてきて涙が出てきたんだと思います。やっぱり正太郎を中心としてナインが一丸となって戦ったことが、ナインのみんなも英夫もそのことが嬉しかったんだと思います。

松本(男) ナインはやっぱり陰をつくり合ったりして、心が一つになっていたと思います。心が一つになったから、あとあとで英夫や常雄たちも正太郎が悪いことをしても、警察に訴えることができなかったと思います。正太郎が陰をつくらなかったら、今のナインの関係はなかったと思います。(板書②)

加藤(女) それぞれ真夏の暑い中、戦っていてしんどいの仲間を支えながら試合をしたことはすごく感動したし、もし私がその中の一員であって試合を乗り越えた時の気持ちを考えると、仲間を支え合った満足感でいっぱいだったと思います。

楠本(女) この試合を乗り越えられたのは、お互いに助け合ってこの試合をみんなで乗り切ろうという気持ちと、みんなで力を合わせて勝ったという気持ちがあったと思います。みんなで団結して試合をしたいという気持ちがあったと思います。

廣瀬(男) このナインが陰をつくったことによって、ナイン全体が一丸となって本当に良いチームとなったと思います。だから心が一つになって戦えたことが嬉しくて泣いたんだと思います。

仲田(男) ナインは9人で一人というように、みんなが助け合って一人が苦しんだらみんなが苦しむというように、みんな助け合って支え合っていたから、最後まで戦い抜けたと思います。

井上(女) さっきの漆原君の意見についてだけど、正太郎が陰をつくったのは、自分が勝ちたい

一心だったと言ったけど、私はそうじゃないと思います。やっぱり正太郎は英夫を少しでも楽にしてやりたいと思って、英夫を思う気持ちから陰をつくったと思うんです。私はやっぱり英夫とかナイン全体のことを思ってやった行動だと思います。

中山（女）私も井上さんと同じ意見で漆原君の意見とはちょっと違うんだけど、やっぱり勝ちたい一心というんじゃないで、仲間のことを本当に大切に思っていてみんなでいっしょに最後まで頑張りたかったからで、やっぱり一人しかいない投手の英夫が本当につらい思いをしているので、ちょっとでも力になってあげたくて、勝ちたいとかそういうんじゃないで、自然とそういうことができたんだと思います。

村山（男）僕も同じで英夫がピッチャーをやって正太郎がキャッチャーだったから、英夫も球に球威がなくなれば一番わかるのがキャッチャーだから、正太郎は英夫の疲れぐあいが一番わかり、日陰をつくるという行動をとったんだと思います。そして、ナインも正太郎にひかれて、やっぱり全員で勝ちたいという気持ちがあって、一人が疲れることにより全員が駄目になるんじゃないで全員が勝ちたかったからこそ、その一人を支えていくことのできる関係がそのナインの中にはあったんだと思います。

藤田（男）僕は漆原君と同じでやっぱり正太郎が日陰をつくってあげたのは、僕がもし正太郎だったとしてもキャプテンとしてというか、捕手としてキャプテンとしてベンチでぐったりしているピッチャーを見たらもう見ていられなくなってしまって、日陰をつくったり頭を冷やしてあげるような最善の努力をしてあげると思います。だから僕は正太郎は勝ちたい一心で陰をつくったような感じがします。

松本（男）僕はやっぱり漆原君や藤田君とは違って、勝ちたい一心もあったかもしれないけれど、やっぱり捕手と投手は心が通じ合い、投手のつらい気持ちがあるのすごくわかり、この試合を精一杯頑張っていきたいと思っていたからだと思います。

中山（女）藤田君になんだけど、ぐったりしている英夫を見て何とかしてあげたいとか、そういうふうに思うのはやっぱり仲間を思う気持ちだと思います。でももし勝ちたいんだったら、ぐったりしているのを見て何とかしてあげたいとかいうんじゃないで、一番始めにこのままだったら勝てるようになるかもしれというようなことを考えるのに、ぐったりしている英夫を見て陰をつくって上げたい、何か力になることをしてあげたいと思うのは仲間を思う心だと思います。

岡本（男）正太郎は英夫が疲れているのを見て、勝ち負けは別として最後まで英夫を始めとするナインと最後まで戦いたいと思ったから陰をつくったんだと思います。

T 4 共に頑張りたかったということですね。

赤澤（男）僕も正太郎が英夫に陰をつくったというのは、みんなでこの試合を乗り切っていかなければならないと思ったからだと思います。それだけナインは一つになれたんだと思いました。

T 5 一つにつながったということですね。正太郎を中心にあれだけ頑張った。そういう関係があった。それにもかかわらず正太郎は驚くほど変わってしまった。今の正太郎について、変わってしまった正太郎について、みんなが思うことを語ってほしいと思います。

村山（男）かつての正太郎はナインを引っ張っていく統率力があって、リーダー的存在の強い人だったから、ナインがついていって正太郎にも人を思いやる心があって、ナインにもその正太郎についていきたいという思いがあったと思います。でも、その正太郎が今では、心から

信じ合っていた仲間から寸借詐欺とか人を騙す行為とかをしていて、それは絶対に許せん行為だけど、正太郎の家では家庭の中でお父さんの女出入りとかがあつて、しょっちゅうもめていて喧嘩のあるたびに正太郎は家出をしていたと資料の中にあつたけど、そんな家庭だったからこそ正太郎がそこまで変わったんだと思うし、周りの大人によって子どもは大きく左右されるし、影響もされやすいものだと思ひました。



廣瀬（男）今の正太郎は許せないと思ひました。旧友だから騙していいので

はなくて、旧友だからこそ騙してはいけないのだと思ひました。陰をつくり合いながら19回を投げきつたせつかくの絆を一人のせいで壊してしまつてはいけないと思ひました。

圓藤（女）村山君は小さい時からの家庭の事情が原因で変わつてしまつたと言つたけど、昔からそんな複雑な家庭環境におかれても、正太郎はしっかりとキャプテンとして新道少年野球団を引っ張つてきたんだから、家庭のもめ事は理由の一つではあるけれど、正太郎がこんなに変わつた直接の原因にはならないと思ひます。

T。今の意見についてどうですか。

井上（女）私は村山君の意見と同じで圓藤さんの意見もわかるんだけど、やっぱり子どもというのは、周りとかそういうのに流されやすくて、だから正太郎も社会の流れとか家の中の事情とかに負けてしまつたんだと思ひます。そして、正太郎はずっと耐えていたものがあつたと思うけど、それは新道が変わつてしまつたとたん、やっぱり正太郎も心の支えみたいなものがなくなつて、今まで親のそういう行動とかも我慢していたけど、やっぱり我慢できないようになったんじゃないかなと思ひます。

T。今の発言に答えてどうでしょうか。

井上（男）どんなに家の事情があつても、やっぱりそこまで信じてくれるナインのみんなを裏切つてまで、そんな悪い行動をするのは、やっぱり正太郎は許せないと思ひました。

中山（女）井上君も言つていたように、今現在の正太郎は悪いと思ひます。これはもうみんながわかつてることだと思ひますが絶対悪いです。でもやっぱり周りの人間のマイナスの影響とか、家族のいろんなもめ事があつたりして、新道が変わつていく中でやっぱり正太郎の中でも、何か変わつていくものがあつたんだと思ひます。

T。いろいろと意見が出てきたけど、今の発言に触れてどうですか。

小川（女）やっぱり人を騙しながら物を盗むことは、どんなことがあつても悪いことだと思ひます。もしそれで人が亡くなつていたら、大変なことになつていたと思ひます。だから絶対に正太郎がしたことは悪いと思ひます。（板書③）

廣瀬（男）あの正太郎が今こんなにおかしくなつているのは、家庭内でいろいろあつたためだと

したらそれはやっぱりおかしいと思うんです。そのためにナインを裏切るといのは、さっきの日陰をつくったときの気持ちに当てはまると思うんだけど、あの日陰をつくってあげたときにナインのことを心から思っていたら、今は裏切っていないと思います。だから、日陰をつくったときの気持ちもやっぱり怪しいような感じがします。

松本（男）僕はこの正太郎は昔は良いことをしたような感じがするけど、やっぱり今は本当に悪いと思います。それから常雄や英夫はこの正太郎を訴えることができなかつたと書いてあつたけど、僕だったら正太郎はやっぱり昔心をついに頑張った仲間だからやっぱり信じているし、訴えようと思つても後でもとにもどってくれると信じて、訴えることができなかつたと思います。

T。今の松本君の発言につなげて。

村山（男）訴えるか訴えないかということなんだけど、僕の場合は訴えられないという方の意見です。英夫と常雄は実際に正太郎のことを訴えなかつたけど、英夫たちの気持ちの中には、正太郎が騙し取ったものは絶対いつかは帰ってくると信じていると思うんです。そんなに信じるのは、少年野球団のときに陰をつくってくれたりして、実際に支えてくれてとても力強い存在だつて、とても尊敬していたからだと思うんです。もし、正太郎を訴えたら自分の尊敬している人を消してしまうことになって、正太郎を支えとして頑張った部分までも消えてなくなってしまうと思つたから訴えられなかつたんだと思います。

T₁₀。今の松本君と村山君の発言にかかわってくるんですけど、正太郎のしたことは絶対に悪いことであり人として許せない絶対に悪いことですよね。これはさつき中山さんも言いましたけど。にもかかわらず英夫は許すだけでなく、「一人前になれたのは正ちゃんのおかげだ」と正太郎に85万円という大金を騙し取られておりながら正太郎に感謝までする。その許すだけでなく感謝までする英夫について、みんなが思うことを聞かせてください。（板書④）

佐々木（女）英夫は本当はすごく正太郎のことを憎んでいると思います。けどあの日陰をつくってくれた正太郎の優しさやナインみんなで作つた思い出を嘘にしたいくないという気持ちがあつたと思います。

土内（女）人間のだらしなさやうぬぼれで自分だけ幸せを求めていくようになった世の中の流れの中で、英夫は85万円分騙し取られたことによって、人間として大切な人間の結び付きだけは失いたくないと思つたんだと思います。

小川（女）西日を遮ってくれた正太郎だし、新道少年野球団での仲間でもあつたので、やっぱり全然日陰のないところに日陰をつくってくれたその思いが、心に残つて感謝という英夫の思いがどうしても正太郎を訴えることをさせなかつたんだと思います。

井上（女）英夫というのは昔の人間と人間のつながりがあつた新道がすごく好きで、今の新道は変わっているけど、その昔の新道に思いを寄せて今まで頑張ってきたんだと思います。そして、新道と言えやっぴり新道少年野球団が出てきて、新道少年野球団が出てくるということは、正太郎が陰をつくってくれたということがやっぱり出てくるんだと思います。だから、そのことを否定することになれば、自分の心の支えをなくすことになるから、そのことはすぐいやだから、もう正太郎がやったことはすごく許せないけどできるだけ正太郎を美化するというか。何でも悪いことをいいことの方に思うように英夫はしているんだと思います。

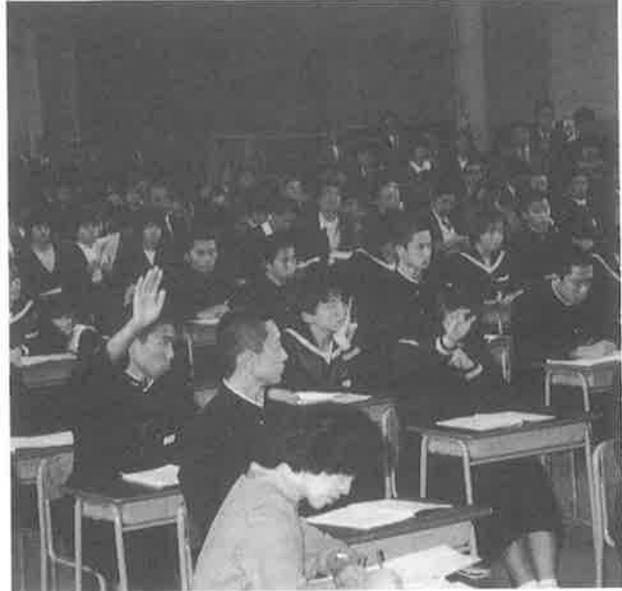
T₁₁。（板書⑤）心の支えだつたということ。

新野（男）正太郎が英夫の心の中ではなくてはならない存在になつていて、そして正太郎を信じ

ないということは、英夫自身を信じないということになると思います。

中山（女）私は最初憎んでいるのに感謝するという意味がわかりませんでした。さっきも出てきたことなただけど、警察に届けるか届けないかという話なただけど、きっと私が英夫の立場だったら警察に届けると思いました。それは英夫に陰をつくってくれたのは正太郎だけだただけど、同じ野球をやっていたメンバーも一緒に陰をつくってくれたので、正太郎だけが陰をつくってくれたのではないと思いながら、正太郎一人よりもたくさんのナインの方を選ぶと思ったからです。そんなことをいろいろ考えているときに、一人の友だちに言われたんだけど、

「もし私が部落の人間として、私
がこれからのこと今のこといろ
ろと悩んでいてその苦しみをわか
ってほしくて、『私は部落の人間
です』って、この3年B組のみんな
に打ち明けたら、そのとき3年
B組のみんなが温かい眼差しで
『何言よん、そんなこと関係ない
よ、これからいっしょに学んでい
こう』と言ってくれたとき、それ
が陰をつくってくれたことになる
んと違うん。私はそう思うんよ。」
と言ってくれたんです。そのとき
私はハッとしたんです。英夫と正
太郎の関係は私たちが同和問題の



学習で築き上げてきた関係とよく似ていると思うんです。どんなことがあっても否定できない、どんなことがあっても切れることのない関係というものが、人間には必要なんだと思うんです。私たちは今まで一生懸命に同和問題の学習に取り組んできました。私の住んでいる板野町には部落と言われて差別されている地域があります。この学習に真剣に取り組み始めたのは、差別を受けて悲しんでいる友の叫びを聞いてからです。今思うといろんなことがあつたけど頑張ってきてよかったと思います。この学習を始めてからナインのような関係ができてきたと思います。一人の子が自分のことを告白する周りのみんなが支える。そしてその子の笑顔がみんなの支えになります。ナインと同じだなあと 생각합니다。

井上（女）私も中山さんの言った通りだと思います。このナインの関係というのが私たち今の3年B組の関係であってほしいと私は思いました。これは私もやっぱり中山さんの言うように、どうして英夫は正太郎のことを許すのかなあと考えていたけど、中山さんと考えていて、やっぱり支えてもらったということはすごく嬉しいことだし、私も2年生からずっと公開授業とか全体学習とかをやってきて支えてもらったことがたくさんあって、そのときのことが今もはっきりと心に残っているし、英夫というのはやっぱり正太郎が支えてくれたことがすごく嬉しかったんだと思います。

井上（男）今聞いていて、やっぱりこのナインの資料は何か僕たち3Bにあてはまると思います。これから徳島県も板野町も発展していくと思うし、やっぱり昔の板野がよかったなあとと思うことがあると思います。僕たちは中学生だけど、これから高校へ進学したり就職しても、こ

こんなナインのような関係になっしていきたいなあと思います。

村山(男) やっぱりこのナインの資料の中には、同和問題学習で学んできたことを土台として考えた方が何かわかりやすいところがあると思います。国語の学習という意味で考えたら答えを見つけるために決まった答えを探すために、みんな同じような考え方になっていくと思うんです。でも同和問題の学習では、お決まりの答えを求めるのではなくて自分の本当に感じたことや自分の中でこみ上げてきたものを意見として語り合うことによって、どれだけ周りが反応してくれるかということが大切だと思うんです。本当の思いと思いをぶつけ合うところに同和問題学習の本当の意味や喜びや楽しさがあると思うんです。また、今まで積み上げてきた同和問題学習によってこのナインの関係は3Bの中にもいっぱいできてきたと思うんです。支え合うということは本当に大切なことだと僕もしみじみ思っています。自分が発表したときに周りが支えてくれて、もっと頑張らないかん、こんな仲間のためにももっと頑張らないかんと思ってきたんです。実際僕は2年生のとき自分の一番苦しい部分をみんなに訴えたとき、みんながどんな反応をするかがとても不安だったんです。そのときに「そんなこと気にするな、いっしょに頑張ろう」という意見があつて、ものすごく嬉しかったんです。このナインの団結とか支え合うということを考えていくうちに、やっぱりみんなのことが真っ先に出てきて、それでこんな大きな授業とかをたくさん経験してきたから、ある程度は自分の思うままの意見が言えるようになってきたと思うんです。それでさつき井上君が言ったように、板野町とか徳島県とかもだんだんと変わっていくと思うんです。変わっていくことによって、昔の方がよかったなあという気持ちも残ると思うけど、大きくなってからも周りにこんな仲間がいて、互いに支え合って生きていくことができればいいと思います。これから高校へ行ったり就職したりして、周りの仲間に自分の心を開いて話のできる人がいなくなったら差別されるかもしれません。だけど、今はこの周りに仲間がいるからどんなことがあっても頑張っていくことができます。実際、将来負けそうになったときも、今のこの仲間に相談できるような関係をつくっていきたいと思います。

松本(男) このナインとこのクラスはほとんど一緒だと思います。ナインも助け合ったり、支え合ったり、協力し合って何か一つのことを頑張っているし、僕らのクラスもやっぱり一人一人が、一人がみんなをみんなが一人を支え合い励まし合って、同和問題学習に頑張っているから似ていると思います。それから今この学習を頑張っていて、やっぱりさつきも言ったんだけど、もう少ししたら中学も卒業で就職や進学をするし、やっぱり就職や進学したら、目に見える差別に出会うことも出てくると思うんです。だから今のこの関係やこの思いとかを忘れないで頑張っていかなければいけないと思います。

圓藤(女) 私もみんなが言うようにナインとこのクラス3Bはよく似ているなあと思いました。それで先生が道德教育と同和教育は違うって言いましたよね。確か、この大会で部落問題ずばりの資料はできんと言いましたよね。でも私はこの資料「ナイン」の学習で、ナインは私たちのクラスに似ているなあというところが出てきたけど、私たちのクラスの今の関係は今までの同和問題の学習によって成り立っているんだから、道德教育と同和教育は全く一緒ではないかもしれないけど、結局はつながっているんだと思います。

井上(女) 圓藤さんの意見が出たんだけど、私たちがこの富田中学校にきて授業をすると聞いたとき、私たち3年B組は同和問題の学習をするもんだと思っていたのに、こういう直接同和問題に触れない資料をするということであつとやりにくいなあと思っていたけど、結局同

和問題の学習も道徳の学習も一緒に人間の生き方につながっているものだから、みんないろいろな意見が出たと思うんです。結局人間というものは支え合ったりして生きていかなあかんもんやし、だから、私は社会の流れとかに流されんようにして今までのみんなとの関係を大切に守りたいんです。私にたくさんの子が自分の一番つらかった部分だった部落に生まれたということを書いてくれたけど、私は絶対にその子たちを裏切ることがないように、その子やが西日に照らされて苦しむようなことがあったら、さっと日陰をつくれるような人に私はなりたいなあと思います。

中山(女) 私も圓藤さんや井上さんの意見に付け足すんだけど、やっぱり始めにナインの資料をもらったときに思ったことは、何か難しいということが一番最初に思って、2回目、3回目と読んでいくうちに、段々いろんな考えが生まれてきたし、クラスでも意見の違う人がたくさんいて、話し合いも盛り上がっているんだけど、どうしても私は考えが変えれんというか、こだわっていたところがあるんだけど、今までの同和問題学習で築き上げてきたクラスの信頼関係と平行して考えていくと、ナインの奥に流れているものがよくわかってきたんです。やっぱりこの資料「ナイン」だけで考えていったら、今のような発表とか私の発表とかはなかったと思います。そして、みんなが心一つにして板野中学校全員で同和問題について学んできたからいろんなことが考えられて、こうやって発表ができるんだと思います。

楠本(女) このナインとこのクラスの関係は似ているところがあると思います。私も前にみんなを信頼して自分の一番つらい部分を打ち明けたんだけど、周りの子が支えてくれたときはうれしかったです。はじめは言おうかどうか迷ったけど、みんなが支えてくれたので言ってよかったと思います。

大森(女) 3年B組とナインはもうそのまま同じだと思います。自分のことを告白してその子がそのままではなくみんなが支えてその子の陰になっているから、このクラス全員がみんな一人一人の陰に入っているんだと思います。

廣瀬(男) このナインと3年B組はやっぱり同じだと思います。この「ナイン」の資料と部落問題学習の資料も根本は同じではないかと思いました。そして、高校に行って困難にぶつかることがあっても、僕は今まで僕を支えてくれた人とか、3年B組のみんなのことを思い出して、自分で自分自身を励ましながら頑張っていくと思います。

T₁₂ 英夫の気持ちや英夫の姿に我々3年B組というつながりを重ねて、みんないろいろな思いを語ってくれた。英夫の思いを今一度かみしめてみたい。最後のところで英夫が「自分たちは日陰なぞありえないところにちゃんと日陰をつくった。このナインにはできないことはないんだ。そんな気持ちでいっぱいでした。その気持ちは今でもどこかに残っていると思います。だから・・・」。(板書⑥) この「だから・・・」の後に飲み込んだ言いたかった思い、この英夫の思いに寄せてみんなの思いを語り合ってほしいと思います。

漆原(男) やっぱり英夫は今も、ナインのみんなの心は一つになっていることを望んでいるんだと思います。

村山(男) このナインにはできないことはないんだという強い気持ちがあったんだと思います。それで僕もこの富田中学校へ来る授業の前に、このクラスのみんなにはできないことはないんだと思って、みんなを信じて授業にきて実際にこの授業をしたら、やっぱりすごいなあって思いました。それで英夫の思いはやっぱりこのナインの関係を絶対になくしていきたくないという気持ちと、ナインを信じていた自分の気持ちを常雄や正太郎や他のナインも同じよ

うに思っていると思って、頑張り続けるもとなっていたんだと思います。

永峰（女）新道少年野球団のキャプテンとして活躍してきた正太郎が、他のナインたちの気持ちを打ち破り常雄や英夫たちを傷つけたけど、今でも優しい気持ちは正太郎の心の中にあると思うから英夫たちは憎めなかったと思います。

土内（女）陰をつくった正太郎が英夫の苦しみを自分の苦しみとして背負ったように、ナインだから、ナインとしてのかげがえのない仲間だから、その心はまだ正太郎の心の中に残っているという思いを込めていると思います。

太田（女）ナインみんなが集まれば陰のないところにも陰をつくれる。そしてできないことはないんだという気持ちが今の正太郎に少しでも残っていたら、自分のやっていることがみんなに迷惑をかけているかに気付いてくれるという自信と信頼が英夫にあったと思います。

T₁₃ 自信と信頼ということですね。

斎藤（女）私が3年B組のみんなを大切に思っているように、英夫も正太郎のことを大切な人と思っていると思います。

松本（男）僕はここでは正太郎を信じているかいなかだと思えます。正太郎を信じていたから、さっきから僕が何回も言ったことだけど、英夫は正太郎を警察に訴えることができなかったし、英夫に感謝までするという思いがでてくるんだと思えます。

井上（女）英夫というのは、自分には正太郎を信じることしかないんだと思っていたと思います。だから正太郎が心を入れ替えて帰るまで、その正太郎がつくった穴を埋めることしか自分にはできないんだと思ったんだと思えます。そして、やっぱり自分たちナインには何もできないことはないと思っていたから、変わっていった新道を自分たちなら昔の温かい関係の元の新道に変えられると思ったんだと思えます。もし、新道の街自体が大きく変わってしまったら、昔の人間と人間との絆があった新道のよさをもって、自分たちは頑張っていくことができるという自信があったんだと思えます。そして、今私は英夫みたいに、絶対に切れることのないみんなとの絆を大切にしたいし、自分たちには何もできないことはないと思っているから、たくさんの人が板野という町をどう思っているかは知らないけれど、私は3年B組のみんなとなら絶対に、板野町に対する偏見の目とかを変えていけると私は今自信を持っています。

中山（女）私も井上さんと同じような意見なんだけど、この3年B組のクラスの中に私がいてよかったと思えます。みんなの前だったらいろんなことを発表できるし、そしてもし友だちとかがその友だちのつらいことを告白してくれたときでも、このクラスのみんなだったら一人にしないですぐに手を挙げて支えてくれるし、そんな仲間とならどんなことでもできると思えます。そして、私もみんなとともにこの板野町をどんなふうと考えている人がいるかわからないけど、そんな偏見の目を一生懸命頑張って変えていきたいと思えます。

松本（男）このクラスは僕の一番言いたいことがはっきり言えたクラスであり、やっぱり心が通じ合ったクラスであるから、この思いを忘れないで将来この思いを生かして、差別とかにも対抗して頑張っていきたいと思えます。

T₁₄ みんなの思いがいついつまった授業になってきた。そのことが嬉しい。そして、本当時間がわずかになってきたんですけど、前の時間の話し合い。またこの時間の話し合い。いっぱい言いたいことがあるだろうけど、あとわずかな時間をもらってみんなの中にある思いを最後出し合って、この時間を閉じたいと思えます。

村山（男）この「ナイン」の学習ももとなるものは同和問題学習だと思います。この資料も国語として考えれば難しいことがいっぱいあって、あまり考えが出てこなかったと思うけど、今まで取り組んできた同和問題学習を土台として考えてみたら、どんどん考えが深まっていくし、出てきた意見についても自分でもっともっと考えていかなければという思いがあって、実際に考えられるようになったのは、同和問題の学習があったからだと思うんです。前の時間に道德の学習と同和問題の学習は違うという話があったけど、やっぱり道德の学習をしていく上でも、今までの同和問題学習の積み上げがあったから考えることができたし、僕たちは同和問題学習の方を先に重点的に勉強していたから、ここまで意見が言えるようになって、この「ナイン」の資料とかもより深く考えられるようになったから、同和問題の学習は人間の生き方を考えていく基本としてとても大切なものだと思います。また、ここまで周りのみんなを信頼できるようになってきて、支え合う仲間ができてみんなとの絆がどんどん深まってきたのは、やっぱり同和問題学習があったからだと思うんです。僕には同和問題学習を通してできた仲間がいたから、今の自分があるんであって、仲間がいなくて支えがなかったら今の自分はなかったと思います。

井上（男）今日の授業はみんなに熱いものがこみ上げてきたと思います。こんなに発表するんだから、みんな一生懸命になっているんだと思います。そして前を見てみると「人間としての生き方を考える道德教育」と書いてあるけど、やっぱり村山君の言うように人間としての生き方を考えていく上では、同和問題学習も道德の学習も変わらないんだと思います。

圓藤（女）この「ナイン」の資料を最初に読んだときは、まさかこの「ナイン」が同和問題学習と重なっているとは思わなかったけど、いざそうなって考えてみたらそうだなあと納得できて、今この場に自分が居れたことをとてもうれしく思います。それで、このみんなとずっとこれからも頑張っていきたいし、ナインは正太郎のせいでくずれていくような感じになったけど、私たちは絶対正太郎みたいな人を出さずにそのままずっと崩れないでいきたいです。

土内（女）今日は私の友だちが初めて手を挙げてくれてすごく嬉しかったです。友だちも嬉しかったと思うけど、その嬉しさが自分のことのように思えてきて、何か本当に嬉しかったです。それと、今日手を挙げられなかった人も、自分ではできないと信じないで、自分はできるんだと信じたら絶対できると思うから頑張ってほしいです。

T₁₅ ありがとうございます。時間がきてしまいました。

生徒 時間延長できるのですか。ほなって手を挙げとる子、ようけおるし……。

T₁₆ 時間もらいます。

姫田（男）今日僕は一回も発表してないけど、さっきからずっと考えていたんだけど、「ナイン」を最初、授業する前は同和問題学習とは全然関係ないと思ってたけど、「ナイン」を勉強していくうちにやっぱり同和問題学習と結び付きがあるんだと思いました。だからこそ何かこんなに熱いものがこみ上げてくるんだと思いました。

川田（女）みんな信頼とかいっぱい言ってくれたけど、私はこの前ちょっと発表できなかつたりして、みんなを裏切ろうとしていました。そのことを先生に言ったら、それは今まで信頼してくれた友だちを殺すことになってしまうと言われてすごくそれから悩みました。だけどそんな私でも、みんながいてくれたから、これからまた燃えられるようになるかなと思いました。

中山（女）私たちもやっぱり川田さんのような人がいて友だちがいて、川田さんのように発表し

てくれる友だちがいるから、これからも頑張ろうと思うし今頑張れているんだと思います。井上(女) この資料を読んでやっぱり最初に思ったことは、経済的には豊かになってきた日本だけど、どんどん人間の心というのは貧しくなりつつあるんちがうかなあと思いました。この正太郎のように社会の流れに流されて変わっていく人ってたくさんいると思うんです。けど私たち3年B組だけは絶対に変わらないままで今の絆を大切にしたいなあと思いました。それでこの勉強をしていて英夫という人は、同和問題を考えていく上でも、人間の悲しみとか部落差別とかの悲しみがすごくわかる人だと思います。だから私たちも英夫のようにずっと仲間を信頼して生きたいし、そして今の3年B組のみんなだけでなく、たくさんの人と『かけ』をつくり合っ、この絶対おかしい差別をなくしていかなければならないと思いました。それに今日みんなすごく輝いていたと思います。

T₁₇ (板書⑦「3年B組の絆」) 終わります。

《授業が終わると同時に開場からの大拍手、生徒が退場する時にも再び大拍手が起こる》

※

この授業の中に同和問題学習の本質を出してきた生徒の発言には、授業をしていた私自身がど肝を抜かれた。

《私は最初憎んでいるのに感謝するという意味がわかりませんでした。さっきも出てきたことなんだけど、警察に届けるか届けないかという話なんだけど、きっと私が英夫の立場だったら警察に届けると思いました。それは英夫に陰をつくってくれたのは正太郎だったけど、同じ野球をやっていたメンバーも一緒に陰をつくってくれたので、正太郎だけが陰をつくってくれたのではないと思しながら、正太郎一人よりもたくさんのナインの方を選ぶと思ったからです。そんなことをいろいろ考えているときに、一人の友だちに言われたんだけど、「もし私が部落の人間として、私がこれからのこと今のこといろいろと悩んでいてその苦しみをわかってほしくて、『私は部落の人間です』って、この3年B組のみんなに打ち明けたら、そのとき3年B組のみんなが温かい眼差しで『何言よん、そんなこと関係ないよ、これからいっしょに学んでいこう』と言ってくれたとき、それが陰をつくってくれたことになる」と違うん。私はそう思うんよ。」と言ってくれたんです。そのとき私はハッとしたんです。英夫と正太郎の関係は私たちが同和問題の学習で築き上げてきた関係とよく似ていると思うんです。どんなことがあって否定できない、どんなことがあっても切れることのない関係というものが、人間には必要なんだと思うんです。私たちは今まで一生懸命に同和問題の学習に取り組んできました。私の住んでいる板野町には部落と言われて差別されている地域があります。この学習に真剣に取り組み始めたのは、差別を受けて悲しんでいる友の叫びを聞いてからです。今思うといろんなことがあったけど頑張ってきてよかったと思います。この学習を始めてからナインのような関係ができてきたと思います。一人の子が自分のことを告白する周りのみんなが支える。そしてその子の笑顔がみんなの支えになります。ナインと同じだなあと思っています。》

また冷や汗の出る発言もあった。

《私もみんなが言うようにナインとこのクラス3Bはよく似ているなあと思いました。それで先生が道德教育と同和教育は違うって言いましたよね。確か、この大会で部落問題ずばりの資料はできんと言いましたよね。でも私はこの資料「ナイン」の学習で、ナインは私たちのクラスに似ているなあというところが出てきたけど、私たちのクラスの今の関係は今までの同和問題の学習によって成り立っているんだから、道德教育と同和教育は全く一緒ではないかもしれないけど、

結局はつながっているんだと思います。》

言いたい放題の子どもたちが、育っている訳でひょっとして、「どうして道德教育の研究大会では、同和問題の資料ができないんですか」というようなことも言い出すような授業であった。たとえば、この後である生徒は立ち上がって、体育館の前の舞台の横に大きく書かれている大会主題を指さして言った。

《この授業はみんなに熱いものがこみ上げてきたと思います。こんなに発表するんだから、みんな一生懸命になっているんだと思います。そして前を見てみると「人間としての生き方を考える道德教育」と書いてあるけど、やっぱり村山君の言うように人間としての生き方を考えていく上では、同和問題学習も道德の学習も変わらないんだと思います。》

その生徒の指さす方向を参観の先生方が注目する。多くの先生方の心を揺さぶっていく場面が続いていく。その授業の中で授業をしていた生徒と私しか気付かなかったことがある。それはその授業で初めて挙手し発言した生徒がいたことだった。雰囲気人が人をつくり予想できない場面をつくっていく。それは授業は5分ほどオーバーしての場面だった。一人一人の精一杯の頑張りが仲間の大きな頑張りを生んでいくことを実感した。感動で胸いっぱいになっていた私は授業のまどめに入ろうとした。私はその全国大会運営委員会の事務局長であったし、その後の日程の面から時間の超過は許されないことは自覚していた。そのときもハプニングが起こった。生徒がその授業の中で私に「時間延長できんですか。ほなって手を挙げとる子、ようけおるし……」と言って抗議した。その場面には私は言葉を失った。中学生がここまでたくましくなるのかと思った。本当に困惑したがうれしかった。授業は15分近くオーバーして終わった。

ある友人が「ビデオに撮ったけど、まさか60分を越えるとは思ってなかったから、途中で最後のところテープが終わってしまった」と言った。録音テープのほとんどが60分だったので、ほとんどの人が60分のテープを用意されていた。その意味で非常にたくさんの人に迷惑をかけた授業となった。この授業が終わった後に拍手が起こった。これは本当に驚いた。授業をしている私が驚いた。本当に嬉しかった。そのときの生徒の笑顔は忘れない。その後、生徒たちは授業会場であった体育館を出ていった。そのとき2度目の大拍手が起こった。拍手の中を退場していく生徒を私は後の研究協議があるので、体育館から見送った。そのとき見た生徒の姿、一人一人の生徒の背中が神々しく見えた。あの感動は忘れることはない。あのとき生徒たちは本当の同和教育、本当の授業をつくるために闘ったんだと思った。

数日たってからであった。部落出身の友人から、友人に別の用事があって電話をかけたとき「授業よかったなあ」という話と共に、あの授業の中で「なんであんな授業ができるだろう」と話をしている人に「あの人は部落の人だからあれだけ頑張れるし、あんな授業ができる」という会話を聞いて、腹が立ったということを知られた。その話が私には「部落の人だから道德教育の研究會でも同和教育をやるんやな」という思いで見られているんだなあと思われて身体の力が抜けていく。いくら頑張ってもそういう目で見られていく部落差別の現実、また同和教育は教育の中核という訴えがなかなか響いていかない現実、私はその思いを生徒たちに訴えた。富田中学校で共に闘った生徒たちへの信頼と尊敬の心、この生徒たちと徹底的に闘おうと決めた。私たちの闘いとは、心の底から部落差別に怒り共に歩もうとする仲間をつくる闘いである。それは人間の心を揺さぶり続ける人間になる闘い、そんな自分にしていく授業をつくることだった。

そんな思いの中で授業をつくっているとき、ちょうど11月19日に徳島県中学校同和教育研究大会が板野中学校で実施された。生徒たちは1年間営まれた同和問題学習の締めくくりとして西口

敏夫先生の『水平社宣言讃歌』の授業に取り組んだ。この11月19日の授業もまさしく闘いであった。この教育は誰のためにしているのか。部落の人のためにやっているのではない。自分のためにやっている。この学習は自分自身を解放していくためにやっているんだ。自分の中にある差別意識、誰もがそれを必死に洗う。自らを洗うためにやっているんだ。そういう自覚が生徒たちの中にできていた。自らの生い立ち、自らの部落との出会いを語る先生が少ない。でも、そのことを抜きにして、自分がこの問題に関わり、どう揺れながら、どう苦しみながら、どうあがきながら生きてきたかを語らずして確かな同和教育が生まれていくはずがない。自分自身のためにこの教育はやっているんだ。自分自身を解放するためにやっているんだ。そういう思いの中で発言を繰り返していく授業となっていた。

ほんのさわりの部分ですけど紹介させていただきたい。見ていただきたいと思う。同和教育とは何か。同和教育に取り組む教師の在り方、本当にこの教育の中でつかんだ喜びというものを子どもたちが語っていく。その思いを感じてとってほしい。

※

【授業記録】第21回徳島県中学校同和教育研究大会公開授業

1991年11月19日（火）

主 題 「誇りうる生き方を求めて」（資料「水平社宣言讃歌」） 板野中学校3年B組
指導者 森口 健司

T：まだ少し時間があるんですけど、この前の全国大会（全日本中学校道徳教育研究大会徳島大会特別公開授業）の日に書かれた生活ノートを紹介して、思いを新たに今日の50分の授業頑張りたいと思います。

1991年（平成3年）10月31日木曜日、今日のこの日は忘れることができないだろう。「こんな授業、二度とできないかもしれない」と思っていた板野郡同和教育研究大会の授業さえ影が薄くなってしまおう程の授業だった。昨日このノートには「緊張もプレッシャーもない」と書いたけれど、さすがに体育館に入った時は少しビビって、それでも隣のY O君としゃべったり、緊張のせいかわ顔がこわばっていたKH君をひやかしたりしていたら、いつもみたいな気分になってきて安心した。おまけに授業が始まった時にはやる気がすごい出てきて、何かわくわくしてきたくらいだった。そんな中で始まった授業、私は「今日こそ発言のスタートを切ってやる」と意気込んで挙手しようとしたら、ほとんどの子が挙手していて驚いた。いつもは発表なんてあまりしない子も挙げていて、「負けられない」という気持ちになった。でも、実のところなんか意見がありふれている感じで「こんなんで大丈夫かな」と思っていた。それがこんな授業になった。そのことが嬉しい。この授業に火をつけたのは、やっぱり同和問題学習のことを出したS Nさんだと思う。3年生になってからは2週間に一度くらいのペースで公開授業があって、嫌々受けた授業も何度かあった。でも、今日は同和問題を学習したからこそ成り立ったんだと思う。やっぱり学習してきてよかった。これで私なりに道徳＝同和問題学習ということが証明できた。10分ぐらいのオーバーで授業が終わった。もっともっと時間がほしかった。最後の礼が終わった時に周りから拍手が聞こえて、一回やんでいたのに退場の時また拍手してくれた。その拍手は私たちが体育館を出るまで続いた。とてもすっきりした清々しい気分になって、つつい顔がほころんでしまった。「ナイン」について言いたいことは全部言ったという感じだった。板野郡同和教育研究大会の授業の終わったとき女子の何人かは涙を流していた。今日の授業には涙はなかった。みんなにこにこして

いた。Y I さんが言っていたように本当に輝いていた。今日の私たちは準優勝どころか、優勝、ついでに全員にMVPでも贈りたい。それも互いの絆を確かめながらの優勝、要するに最高の試合ができたということで胸がいっぱいだ。この授業を3年B組のメンバーで受けられたことをとても嬉しく思うし誇りに思う。みんなに心からお礼が言いたい。徳島県中学校同和教育研究大会は「3年B組の授業」を期待してたくさんの人がくるだろうけど、今日のような授業がしたい。そして、一生3年B組の絆を大切にしていきたい。先生もお疲れさまでした。そしてありがとうございました。

今日の授業、今まで取り組んだ2年間のいろいろな思いが集約した1時間になるように頑張りたいと思います。始めます。

Y I (女) 起立、礼、着席。

T。今日も一筋の光を求めて、みんなと同和問題に寄せる思いを語り合いたいと思います。今まで取り組んできた同和問題の学習、その学習に寄せる思いを込めてみんなで読み合った水平社宣言讃歌について、(板書「水平社宣言讃歌と私」)水平社宣言讃歌が私にとって何であるか。今までの学習を通してかつての自分、今の自分を振り返りながら、思いを語り合いたいと思います。

S E (女) この資料を一番最初に読んだ時は、なんかやたら長くて読む気もあんまりならなかった、2回目ちょっと読んでみた時は、やっぱり半分くらいで何が言いたいかわからなかった、3回目ぐらいからわかってきたような感じがして、それでもまだよくはわかっていません。私にとってこの水平社宣言讃歌という詩は、今までの資料の中で一番難しく、それでも一番身近に感じる資料です。

H M (男) 僕から見てこの水平社宣言讃歌は、僕がずっと前からいつも言っていることだけど、団結という言葉が好きで、その団結という言葉を変えてもっと好きになったような学習をした感じがします。団結は弱い者が強い者たちに勝つための一つの手段であるというのが好きです。団結の意味を学ぶことがなかったら、このクラスも今のような姿にはならなかったし、このような見事な同和問題学習とかには取り組めなかったと思います。

K K (女) さっきのH M君の意見によく似ているんだけど、私も団結という言葉が好きになって、郡同研の時にはすごく燃えたんだけど、途中いろいろあってそれで全道研の時に中山さんとかが支えてくれたのが嬉しかったです。

K H (男) 水平社宣言讃歌は僕にとって、今までやってきた全部の資料の総まとめで、今までの資料のすべてがこの中に入っているような感じがします。

K U (男) この水平社宣言讃歌は文としてはあまりまとまってない感じなんだけど、何かすごい力強いものを感じて、これが部落の人たちの本当の思いであるし、人間としてのあり方もすばらしいあり方を述べていると思います。

S N (女) 私もみんなと同じで今までいろいろな資料を学習してきたけど、「淡染一揆」にしても「意識の芽ばえ」にしても、今までみんなと勉強してきた資料は、結局この水平社宣言につながっていたんだということが水平社宣言讃歌を読んでわかりました。

M M (男) この水平社宣言讃歌を勉強して、その前に水平社宣言を学習して何となくだけその水平社宣言を自分の生き方につないでいったんだけど、この水平社宣言讃歌を勉強したら、水平社宣言に書かれていることは、もっと生活の上に生かすことがたくさんあるんだということがわかってきたと思います。宣言の中に「われわれがエタであることを誇りうるときが

きた」というのがあるけど、水平社宣言讃歌によって心から、自分が部落に生まれたということ誇りうるときがきたのだというように受け止められるようになりました。だからこの水平社宣言讃歌は僕が生きていくための支えとなり、また授業を頑張っていくためのエネルギーとなり、僕らにとって今まで学習してきた中で一番大切な資料になりました。

Y I (女) この資料は私にとってとてもいいものになったと思います。今まで私が一番好きだった資料は佐藤文彦先生が書いた「美しさを求めて生きる人生を」というのが一番好きだったんです。今までやった資料で部落の人が自分たちのことを書いた資料は、何かその人の気持ちになりにくくてわかりにくいことがあったけど、この水平社宣言讃歌というのは、部落に生まれたとか生まれなかったとか、そういうこと関係なくて人間としてあたりまえのこと訴えていると思うんです。今までの学習で自分も成長してきたからこんな思いになれるんだと思うけど、絶対部落差別はおかしい問題なんだから、自分が部落に生まれた生まれなかったというのは関係なくて、一人の人間として考えてみたら、本当におかしい問題だということをお知らせしてくれた資料であり、すごく自分に一番近いというか、わかりやすい資料だったと思います。

H I (男) さっきのMM君の発言につなげるような形になるけど、僕も水平社宣言や宣言讃歌を勉強してきて、自分の生き方の支えとなるものがいっぱいできてきたと思います。この資料を勉強していなかったら、やっぱりずっと部落に生まれたことを隠していこうという気持ちが先にきて、部落差別とたたかって生きるといような思いは沸き起こってこなかったと思います。今、なぜか嬉し涙というのか、何かそういうふうなのが流れてくるんだけど、やっぱりこの勉強してよかったと思います。

S N (女) H I君を始めクラスのみんながいて、私が意見を言ったら、手を挙げて私の意見に付け足してくれたり、また誰かが言った意見に私が付け足したりして支え合っていて、そんな仲間ができたのはこの勉強を始めてからで、水平社宣言讃歌という詩は私も一生大切にしていかなければならない一つだと思いました。

K H (男) 僕もS Nさんと同じで、やっぱり自分が発言したらみんなもそれに応えて発言してくれることがとても嬉しいです。そしてこの資料がなかったら差別の深い意味を一生わからずに過ごしていたかもしれません。

K T (女) 私はこの資料やこの学習から、自分一人ではないということがわかりました。怒りを言葉に変えることで、相手に苦しみや悲しみが伝わってよりよい人間としての結び付きが生まれ、私たちは深い絆で結ばれていくことがわかりました。

T S (男) 僕はこの学習の中から、このクラスはとてもすごいなあと思いました。3年生になったとき、始めの頃はあまり友達もいなかったのが不安だったけど、いろいろ溶け込んでいて郡同研や全道研や、すごい授業ができてとても嬉しかったです。

Y I (女) ちょっと資料から離れるんだけど、私たちはずっと2年生の時から同和問題学習に取り組んできて、今までの授業の中ではすごく悲しくて涙を流すこともあったけど、今のみんなは悲しみではなくて差別に対する怒りで燃えていると思います。そして、前の郡同研の時はこんなにたくさんの先生方はいなかったけど、この県同研ではこんなにたくさんの先生方が私たちの授業を見に来てくれたということは、私たちにはすごいそれだけの力があるんだと思います。私たちには人を変える力があるから、絶対差別をなくすという自信も生まれてきました。やっぱり同和問題学習に取り組んできてよかったと思います。

MM (男) 今のHI君の涙のおかげで、みんなの支え合う関係がより強まり、またみんなが熱く燃え上がることができたと思います。郡同研の時はまだ悲しみの涙だったと思うけど、今は違うと思うんです。今のHI君もそうだったけど嬉しくてたぶん僕と同じような考えを持っているんだと思うし、人の涙というものはたぶん嬉しい時に流すからこそ、その一粒一粒の涙が一段とすばらしいものになるんだと思うし、悲しんでいるだけだったらこの問題は絶対に解決の方向には進まないと思います。このクラスは絶対自分の意見を本音でぶつけ合う授業ができていし、もし嘘で言っていることがあったとしてもそれを見抜く力がみんなにできています。でも最初の頃や1年生の時なんかは、うわべだけでほとんど自分の心とかをみんなにさらけ出すことがなかったけど、この1年半みんなとこの学習を続けてきて、みんなをよりよくわかって信頼する関係ができて、ナインでも習ったように絆とか団結とかの強さを知ることができたし、今まわりには仲間がいるからこそ、僕も頑張っていけるんだと思うし、たぶんみんなもそうだと思うから、まわりのみんなを信頼して頑張ってもらいたいです。

SN (女) 私も昔は本当に恥ずかしいんだけど、差別に無関心で小学校の時とか中学校1年生の時とか勉強していたことはしていたんだけど発表もあまりしなかったし、建前ばかりで差別はいけないとか、そういうふうなことばかり言っていたけど、2年生になって森口先生のクラスになって初めて差別の深いところまで知ったというか、そういう話し合いができるようになったんだけど、やっぱり始めの頃はしんないなあと思うて、私には関係ないって思いよったんだけど、2年生の全体学習の時に友だちが泣きながら自分が差別されてきたこととか、部落出身だということを打ち明けてくれた時から、やらなあかんと思いだして、友だちをそこまで苦しめる差別を許したらいかんというふうに思うて、真剣に取り組んできたんだけど、やっぱり私一人では差別はなくならないけど、このクラスのみんなとだったら差別をきつとなくせると思います。

YO (男) 郡同研の時にHI君とか、たくさんの子が涙を流したけど、今HI君が流した涙は喜びの涙に変わっていると思います。

HM (男) 僕もSNさんと同じで中2の時は発表をしていたかもしれないけれど、ただ紙に書いた文をただ読んでいただけで、心の奥底にある思いを語ったりすることはなかったと思います。今はそのときそのときに思うことを友だちの発言を聞きながら、感じると思うことを素直にまとめて発表するようになってきました。昔は授業前に書いた文章を読んできたので授業の中で沸き起こってきた僕の本当の気持ちをみんなに伝えることができなかったと思います。この学習はただ文を読むのではなく、そのときそのときに揺れている思いを語り合っていかなければ本物にはならないと思います。それから今勉強しているのに下を向いていたりしている子がいたら、上を向いて発表してください。

YI (女) 私は中学校1年生のとき、やっぱり道徳の授業とかもあったけど、必ず自分のクラスに部落の子がいてあんまりめったなこと言うたら、やっぱりやばいとか思っていて、結局綺麗事でも何にも差し障りのないような言い方しか言えなかった、それで2年生の時に全体学習とかでまず本音を語るということを学んで、家のこととか一番自分の醜い部分をさらけ出し始めてそれからなんですよ、真剣にこの問題に取り組み始めたのは……。それで3年生になって振り返ってみたら、今はその部落の子とかそんな関係なしに差別している社会とかに立ち向かっていけると思うんですよ。だからそう自分が変わったことが今はとても嬉しく思います。

K O (女) 私は2年生に入って公開授業を始めた時、どうしてこんなことするんだろう。こんなことするからみんなは部落のことを知ってしまい、部落差別がなくならないんだと思っていたけど、そのまま放っておいたら、やっぱり昔の人たちが孫たちに間違っただけを教えてしまうから、今の私たちが正しいことをしっかりと真剣に勉強しなければいけないと思うようになってきました。そして、そうすることによって何年か先には部落差別は必ずなくなっていくと思います。

K T (女) 誰でも自分の苦しい部分を語っていくということは苦しくつらいことだと思います。けどその苦しい部分を乗り越えて、本当の思いを語り合うことができるようになった時、私たちは本当の人間として生きることができるんだと思います。私も部落に生まれたけど、小学校5年生で自分が部落に生まれたということに気づいたんですけど、そのときは死んでしまいたいと思いました。今この同和問題の学習を積み上げてきて思うことは、歎くことばかりでなく怒りを持って、そしてその怒りを言葉に変えて訴え語っていくことによって、人間は本当に変われるということがわかりました。

S E (女) 全道研の終わったときに先生が、「先生が部落の人だからあんなに頑張れて、あんな授業ができるというような囁きをした先生がいた」と先生の友だちから聞いたと言っていましたけど、私たちの中には部落に生まれなかった子もいるし、部落に生まれて悩んでいる子もいるけど、そんなこと関係なしにみんなでこの学習に必死に取り組んでいるのに、部落に生まれなかった子は部落問題をうわべだけで取り組んでいるように言われたみたいで、それを聞いたときすごくくやしかったです。

K K (女) 私もS Eさんと同じで先生から先生が部落出身の教師だからそんなに一生懸命なんじやと聞いたとき、すごく頭にきて生徒に本当の生き方を教えないかん先生が、どうしてそんな言葉が言えるのかなと思いました。

Y I (女) 私も先生からの話を聞いたとき、すごくくやしかったです。私たちはそんな部落に生まれたとか生まれなかったとか関係なしに、この差別自体がおかしいことだし、このことは人間としてなおしていかんあかんことなのだと思います。はっきり言って私はこの学習は、部落の人のためではなくて自分自身のためにこの問題の学習に取り組んでいるつもりです。

M M (男) その先生はたぶん、この学習の本当の重要性が受け止めることができているんだと僕は思います。そして、人の生命に関わるという差別の厳しい現実を知っていたら、そんな情けない言葉は絶対出てこないと思います。この問題は部落に生まれたとか生まれなかったということ抜きで、すべての人が自分自身の問題として考え解消に向けて取り組んでいかなければ、絶対解決していかない問題だと思います。人間は大人になると人間としてすばらしくなっていかなければならないのに、自分の差別心は柵において人のことはとやかく言うけど、自分は差別の固まりという先生もいるんだなあと思うけど、僕たちはそんな大人や先生の差別心とかに気付いてしっかりと訴えていかなければ、部落差別を始めとする差別は、その人の心からは消えないと思います。そのことは僕も僕の中にも差別心があってこの学習をしっかりと続けていかなければ、その差別心は年をますごとに段々と大きくなっていくし、根強く残っていくと思うんです。だから、僕自身この学習を大切に続けていきたいです。それと部落差別を残してきた大きな原因として僕は、部落問題に無関心な人と、この学習を正しく学習してこなかったおじいさんやおばあさんなど、この教育を受けることがなかつ

た人たちの二つに大きな原因があると思うんです。その中である意味で一番こわいのが無関心な人と僕は思うんです。部落差別をなくすために生きる人生はものすごい喜びがあるけれど苦勞も多いと思います。無関心な人は真剣に考えることが少ないということだから、無関心な人のほとんどが、差別とたたかう側と差別する側に分けたら、差別する側に流されてしまうと思うんです。僕は部落差別に無関心な人を絶対につくってはいけないと思うんです。すべての人が部落問題を自分自身の生き方に関わり、人の生命に関わる大変な問題なんだと自覚していかなければならないと思います。僕はこの学習は人間としての本当の生き方をつかんでいく学習だと思うんです。僕はこの学習から自分に自信がもてるようになって、人前でしゃべるのも緊張感がなくなって、いつも思いきり自分の思いをぶつけていくことができるようになってきたと思います。絶対に負けないというものをつかむことができたと思います。

T。今のMM君の発言につなげてほしいです。

KH(男)全道研の授業のとき、先生をあの人は部落の人だからといった人は、単に部落ということを知っているだけでこの部落ということが大変な差別の問題であるという自覚がないだと僕も思いました。さり気ない言葉であってもその人を絶望させたり、大きく傷つけて死に追いやっていくことだって起こってきたこの差別の問題をもっともっと真剣に自分自身の問題として考えられないのかなあと思いました。

SN(女)私たちがあれだけ一生懸命頑張って発表して、周りの人とかがものすごい拍手をくれて胸がいっぱいになっていたあの中で、そんな人がおったと思ったらすごいショックでした。その人たちはちゃんと同和問題について学んでいなくて、学ぶ環境も周りになかったと思います。私たちから言わせてみたら、その人は無関心な人というのもあるけど、将来同和問題学習に対する本当のことを知らないでずっと生きていくのは人間として惨めで、ある意味で人間としてかわいそうだと思います。

KK(女)昨日、佐藤文彦先生の書いた本を読んでいたら、本の中に「一見無邪気に見える子どもたちの表情の奥にある悲しみが見えないのでは、教育はできない」というのがあって、その言葉がすごく心に残りました。やっぱりそういう心の奥まで悲しみが見えなかったら同和教育はやっていけないんだと思いました。

YI(女)この前の授業のときも言ったけど、同和問題の学習に取り組んできたことによって、大人だけでなくいろんな先生の裏側まで見えてきて、先生というのは尊敬するものという気持ちもあるけど、部落差別をしている先生は自分が教えている生徒まで結局差別していることになるでしょう。だから、先生不信心みたいな感じになってきたんだけど、よく考えてみたら、私たちは森口先生に出会えてこういう授業をみんなで一緒にやれたから、ちゃんと差別の本質までわかっているけど、その先生たちは自分のおじいさんとかおばあさんとか、親から部落の悪いイメージを吹き込まれたままで何が何だかわからない状態で教師になって、そのイメージをぬぐいさることができない状態にいるんじゃないかと思うんです。だけどこの部落問題というのは考えてみれば本当におかしいことで、アメリカとかで人種差別とかがあるでしょう。それって見た目で黒人か白人か違いがわかるでしょう。その差別も絶対におかしいけど……。でも部落差別ってほんまに区切りがあるように見えてないように思うんです。先生から「ほんまに部落に生まれたと思うていてもその証拠がどこにも見つからなんだ」という話や、「自分が部落でないと思うていても自分が部落でない証拠もどこにも見つからな

かった」という話を聞いたことがあるけど、ほんまにそうだと思うんですよ。何かその人の血が違うわけでもないのに、ほんまに自分が部落なんかどうか決定的な確証もなしに、人が勝手に「あの人が部落で、あの人が部落でない」と言って差別していくということはほんまにおかしいことだと思うんです。

- T 4. 水平社宣言讃歌についてみんなにいろいろな思いを求めたんですけど、やっぱり今までに取り組んできたものがあまりにも大きすぎて、宣言讃歌と今までに学習してきた思いとがいっぱい重なっていきますね。これは今までの学習の中でも話したんですけど、先生にとってこの宣言讃歌は宝物なんです。西口敏夫先生の「水平社宣言讃歌」という一冊の本、大事に大事にしています。その本の中にある「よろこび」という詩はこの十年近く心の支えとしている詩です。みんなと同和問題学習を積み上げてきた一つ区切りとして、大きく飛躍し、より大きな峠を越える一つとして、この宣言讃歌を勉強してきたわけですけど……。讃歌に触れてでもいいです。今まで取り組んできた中で、全体学習やクラスの同和問題学習、そういったものを思い起こす中で私にとってこの学習とは何だったんだろうか。かつての自分、今の自分、自分自身の奥に流れてきたもの、今流れているもの、そういうものを思い返しながらかつて同和問題学習に寄せる思いをあと残された時間、語り合いたいと思います。
- M I (女) 2年生からこの問題に取り組んで公開授業とかいろいろやってきたけど、さっきMM君が言ったように私は下を向いたままで発表をしないときもあって、私を信じて必死に自分を語ってくれる人に応えず下を見ていることは、その人を絶望さし、その人を殺すことになると私も思うようになって、絶対私は信頼を裏切る人を殺すような人間にはなりたくないと思いました。
- T K (女) 私は家庭訪問のときに先生から初めて、自分が部落に生まれたと聞かされて思いきり泣いてしまいました。それでも郡同研のときは自分の本当の気持ちをみんなにぶつけることができました。でもそのときもなぜか悲しくて泣いてしまいました。今はもうそんな悲しみや苦しみとかはなくて、この授業でも涙なんか流さずに発表できるようになりました。そんな泣いていた私を変えてくれたのは、私の友だちの支えや励ましがあつたのと、友だちを心から信頼できたからです。私はその友だちに感謝しています。
- M S (女) 今までの私は部落に生まれたということは、隠さなければならぬものとしか考えていなかったけど、郡同研のときに私が部落に生まれたと言ったときみんなが支えてくれて、みんなが一つになれたなあと思いました。私は同和問題を学習していくことは人と人とをつなげていくことだなあと思っています。
- T F (男) 今までこの学習をしてきて、最初の頃は手を挙げて発表するときに、自分で手を挙げようと思っていても、10分ぐらい手を挙げることができなくてそのままみんなの意見を聞くだけだったんです。でもみんなの意見を聞いている中で、僕自身の中で変わっていくものがいっぱいあってやっと手が挙げられるようになったんです。それでも長い時間が流れていくうちに部落問題をやっぱり自分には関係ない問題という気持ちが出てきて、また手を挙げられんようになって、今も頑張らなあかんという気持ちと自分には関係ないという気持ちの両方があるんです。だから、いつもこの授業の度に自分を反省しながら頑張ってきているんです。そんなときにある子が資料についての考えをまとめる学習プリントをそんなん適当に書いてくと言ったことがあるんです。そのとき僕はものすごく腹が立ったんです。その子と同じような気持ちにならんと心の底から腹を立てることができたのは、僕の中にまだ弱い部分もあ

もあるけど、心の底から部落問題をなくしていかなあかんという気持ちが強いんだと思って、この気持ちを大切に頑張っていかなあかんと思って今頑張っています。間違っていることを間違っていると言えることってほんまに大切やと思います。僕は間違っている友達に「そんなこと言うな」と言えたことによって、自分というものに自信を持ちました。

H I (男) 今日もまた一つ大きな峠を越えられたと思います。やっぱりみんな頑張っているから、自分も胸張って頑張っていくことができるんだと思います。やっぱり「人の世に熱あれ、人間に光あれ」で、やっぱり人間みんな一緒なんだと思います。部落に生まれた部落に生まれなかったということにこだわるのではなくて、一人の人間としてこれからもずっと下を向かず胸張って



頑張っていきたいと思います。そして、やっぱり何かしらんけどいつも涙が出てきてしまうんだけど、これからは涙を流さないようにずっとこの学習やこの出会いを大切に、ずっと将来も頑張っていって、この3年B組の絆というものをいつまでも持ち続け頑張っていきたいと思います。

S F (女) 私はこのクラスになってから、中1のときにいじめられた子に今も変な目で見られているということをよく話したんだけど、それってすごい私の誤解だったんです。この前のその子と自転車置き場で会ったんだけど、その子が話し掛けてきてくれてなんかその子がすごい変わったなあという感じがして、すごく嬉しくて何か私もその子のことすごい悪い目で見ていたけど、それってすごい私が誤解していたんだと思ったんです。ある意味で私とその子を避けて反対に仲間外れにしているような感じだったけど、その子が話し掛けてくれたときに、この子はこんなに変わっているのに、私の勘違いでこの子を逆に苦しめていたんじゃないかなって、すごく自分の狭い心が情けなくなって自分の思ってきたことを反省したんです。そして、ほんとは公開授業とかがすごくいやだって、公開授業のときも何も考えずにぼんやりしていることがあったんです。でも3年生になって森口先生のクラスになったときに、Y IさんやS NさんやM M君とかいろいろな人がすごい発表して授業中胸がいっぱいになってきて、心から私も頑張らないかと思うようになってきたんです。ほんとにY IさんやS Nさんやクラスみんながいてくれて私もこんな考えがもてたんだなあ、すごくみんなにお礼が言いたいです。

Y N (女) 2年生から取り組んできた全体学習を始めとする同和問題の学習は、私に勇気を与えてくれました。その中でいろんな友だちが自分をさらけ出して語ってくれているのに、私は下を向いたままずっと黙っていました。それが今では発表することはまだまだ難しいけど、語ってくれる友だちの言葉を自分なりに一生懸命に受け止めることができました。それが私にとって一番嬉しいです。

J K (女) 2年生から同和問題の学習をしてきた中で、私の心も大きく変わったと思います。自分が部落に生まれた人間として、自分自身の本当の気持ちをぶつけるような発言はできませんでした。でもこの前の全道研のとき、このクラスのみんなに自分が部落に生まれたことを打ち明けました。自分の心の奥にある本当の思いを語っていくことにより私は、人間として

の本当の生き方をつかんでいくことができるんだと信じたからです。本当のことを訴えていくことはすごく勇気がいったけど、みんなが私を思いきり支えてくれました。あの授業の後、私は本当の友だちができたんだと思いました。自分の心を締め付けていた重苦しい部分を語るができ、これからの人生を人間として堂々と生きていく喜びをくれたのは、先生や3年B組のみんなが支えてくれたからだと思います。

K T (女) 私はずっと前2年生のときは、自分には語ることはできないんだと信じていて、それを理由に発表することから逃げていました。それで繰り返し繰り返し発表できる子や語れる子がうらやましいとずっと思っていたんだけど、でもそんなことうらやましいと思うのがおかしいと思いだして、自分にもできないことはないんだと信じて発表したら、昔のことが嘘のように発表することができるようになり、今はこうやってこんな大勢の人の中でも手を挙げて発表できるようになりました。まだ手を挙げることができている人も、絶対できないことはないので一生懸命手を挙げて発表してみてください。

T 5 はい、頑張りましょう。

K K (女) 部落に生まれたというとても苦しいことをみんなに語っていき、自分自身が人間として胸を張り堂々と生きていくことができるかどうかは、周りのみんなの取り組んでいく姿勢や雰囲気が決まってくると思うんです。いくらその人に勇気があったって、周りがしらけていたりみんなで共に頑張ろうとする思いがなかったら、絶対に立ち上がれるものではないし、語ることもできないと思うんです。一人一人の仲間を支える周りの雰囲気がとても大切だと思います。みんなで一人一人を大切にしていって、よりよい雰囲気を作っていくことができるように頑張っていきたいです。

M O (女) 私はこの前、クラスの中で部落問題について話し合っていたときに、「自分の中にはおじいさんとかおばあさんとかが差別してきて部落の人を苦しめてきたという、人を差別してきたという血が混ざっているのがいやじゃ……」と言ったときに、Y Iさんとかが「この勉強を徹底的にしていって、そんなこと言うのがばからしくなってくる。M OさんはM Oさん自身でしかないんで……」と言ってくれたのがとても嬉しかったです。今までこの学習をしてきて私は差別していないと思っていたんだけど、この資料を読んで自分の中にものすごく差別していたところがあるのに気付いて、自分の中にこんなに差別心があるのに、何かずっと無関心だったことが恥ずかしかったです。

M M (男) 涙を流すことではなく、自分が部落に生まれたということを誇りに思うことによって、この学習は人間としての本当の喜びをつかんでいくことができるし、より人間としてすばらしい生き方を求めて頑張ることができるから、もっともっと早い時期に自分自身が人間らしく生きるためにこの学習をとらえて、一生懸命にこの学習に取り組むことができたら、もっともっと自分自身成長していただろうし、もっと早く変わったと思うんです。小学校の頃や中学校1年生のときだったら、僕自身真面目に取り組むこともなかったし、授業を真剣にする姿勢も周りになかったし、何かうわべだけで終わっていたような授業だって、絶対何も進歩のない授業だったと思うんです。でも中学2年生から頑張ってきた今の自分を見ると、すばらしく進歩することができたと思います。僕は僕自身が部落に生まれたと知ったときものすごいショックが僕の中に沸き起こってきたんです。それはそれまでに部落のことなんかを小学校の高学年頃から教えられていたけど、部落の悪いイメージだけしか心の中になくて、とにかく部落というところは差別されて惨めなものとしか授業で教えてもらってなかったから、あんなショックがあったんだと思うんです。今考えてみると部落に対するマイナスのイメージしか教えてもらわなかったからそうなったと思えてくるんです。でも今はマ

イナスをプラスに変えるというか、自分をより大きく成長させていくことを教えてもらっているように思います。やっぱり小学校のときにもちゃんと学習して、中学校1年生のときにももっとちゃんと学習していたら、こういうショックも受けなかったと思うし、今僕たちが続けてきたような学習をもっと昔から続けていたら、部落差別というものはもっともっと小さいものになっていたと思うんです。ただ時間をこなすうわべだけの授業だったら、絶対この先なんぼ同和問題の授業をやっているだけでも、やったというだけで生徒の中には部落問題を部落という惨めなところに生まれた人の問題としてしかとらえられない授業となって、本当の意味で差別をなくしていく授業にはならないと思うんです。僕たちが中学2年からやってきた本音の同和問題学習をこれから先も大切にして、絶対部落差別をなくしていかなければならないし、大きくなって絶対差別者にならないようにしていかなければいけないと思います。



R S (女) 同和問題を学んできて私は変わったと思います。1年生のときにお母さんとかお父さんの前で同和問題の話をしたとき、お父さんもお母さんもとともつらそうな顔をしたから、もうこのことは絶対口にしないと思っていたけど、この頃だったらお母さんとかお父さんの方から同和問題のことを話し掛けてきてくれるようになりました。私は同和問題の学習は人間の本当の生き方をつかんでいく学習だと思います。

K U (男) この学習をするまでは、クラスの友だちでも言葉の上の仲間という感じで、よく知らない友だちもいたんだけど、この学習をしてきて一人一人が自分の存在を自覚してみんなが助け合う雰囲気ができているから、本当の仲間というのが何であるかがわかってきて3年B組のみんながすごい固い絆で結ばれたと思います。

S E (女) この学習をしてきて私のはっきりと思ったことは、人を変えていくのは周りであって、自分が変わるのも周りの影響があって変わっていくんだと思いました。この学習のおかげで私たちは何かすごい絆というか、切っても切れない結び付きができたと思うし、このメンバーだったら高校へ行って離ればなれになっても、挫けそうになったらまた会って自分のことを言い合えて支え合っていけるという自信があります。

M T (男) 2年生の最初に先生と出会って、そのときに最初先生が「わしの目を見い」と言うて「目を見て話をするもんじゃ」と言うて、先生の目を見ていてこの先生はどこか違うなあと思いました。それでいろんな資料を勉強していく中で最初の方は、何か自分の書いていることでも発表しようと考えて、震えながらも手を挙げて発表していたんだけど、繰り返し授業があった中で発表しないで授業を終わったら楽だって、その後の授業も発表せんと黙って下を向いて授業を受けたら楽だって、でもこのままずっとおるんではあかんあと思うて、何回か手を挙げて言おうと思ったんやけど、なかなか手が挙がらないでいたんだけど、差別は絶対許したらあかんし、周りの雰囲気に流されて部落の悪口を言う人間に絶対ならないためにも、楽な道を選ばずに僕自身を鍛えるためにも発表していかなあかんと思うし、その頑張りが大きくなって周りの雰囲気に流されないような人間になっていくことにつながると

思います。

K M (女) 私はこの学習に取り組んでなかったら、差別心があつてずっと差別していたと思います。それでこの教育に取り組んできて少しずつだけ差別心がなくなってきたと思うから、この学習に取り組んできてよかったと思います。これからもこの学習に取り組んでいきたいと思います。

S N (女) 道徳教育の全国大会のときに、私の友だちが一人手を挙げられなかったと言って、すごい気にしとったんだけど、それでみんなのこと裏切ったことになるのか言うて、すごい気にしとったんだけど、それで「今度頑張ったらええで」と言うたら「今度頑張る」というふうに言よって、それで今発表してくれてすごく嬉しいです。

K T (女) 下を向いているのはやめてください。何も逃げることもないし、何もおそれることもないと思います。緊張はみんな一緒だと思います。今日自分は手をあげられなかったと過去形にしないで、この場で今という瞬間を大切に語ってほしいと思います。

K N (男) 僕は2年生のときは、同和問題とかはどうでもいいと思っていました。全体授業のときでも先生に当てられて「ああ、いややなあ」と思いながら、学習プリントを見ながらでしか発表できなかったけど、今はこの3年B組になってから下手でも自分で下を向かずに発表できることができたのが嬉しかったです。

K K (女) 50分という時間はすごく短いような気がします。私はもうだいぶ80%ぐらい、私の心は変わっているけど、まだ変わっていないところもあると思うのでB組のみんなと一緒に変えていきたいと思います。それで私のお母さんとか家族の心も変えていきたいと思います。

Y I (女) もう時間がきてしまつて言いたいのに言えなかった人もいると思うんですよ。だけどこの3年B組だったことを誇りにして、これからはずっと頑張つてほしいと思います。そして、部落に生まれた人はこれは絶対に隠して悲しんでそれですむ問題じゃないと思います。絶対この問題はおかしいから、絶対立ち向かっていかなければいけないと思います。そして、先生から聞いたことがあるんだけど、私たちがみんなで燃やし続けた部落差別をなくしていく光と炎を絶やすことなくずっと一生持ち続けて、差別解消まで共に向かつていきたいと思います。そして、この光と炎を大切に燃やし続け、私たちのこれからの人生において出会う人にこの光と炎をともし続けて、この差別解消の取り組みをすべての人の願いにしていきたい。そしてそのときには絶対日本から部落差別はなくなっていると思うんです。だから今ここにおいでる先生方も、私たちのこれだけ頑張った姿を見てくれたんだから、この火を絶やさずにずっと差別解消の日まで頑張つてほしいと思います。

T。終わります。

Y I (女) 起立、礼、着席。

※

たくさんの先生方がこの授業を参観した。生徒たちに多くの先生方が声をかけてくれた。「感動した」「よかった」という話をされたとき、生徒たちはしっかりと言葉を返している。「先生、学校に帰られたら同和教育頑張ってください。」これは、先生自身の生活をぶつけていく。先生自身の生き方をぶつけていく。そんな同和教育を頑張つてほしいという願いからだった。わかりきったこと、答えのはっきりでたことをいうのはでなくて、差別の中をどう揺れながら、どう苦しみながら、自分自身の中にある差別意識のかたまりである部分に気づき、どう立ち上がってきたか。自らの本当の思いを語っていく同和教育を頑張つてほしいというのが生徒たちの願いであった。

私はこの子らと歩んだ1年の取り組みをこの年度末に一冊の冊子にまとめた。『よろこび』と

いう題をつけた。これは私のずっと心の支えであった西口敏夫先生の『よろこび』の詩の題からとったものだった。部落に生まれたことが何でよろこびになるんだ。私は大学を出た2年目、確か24才のときだった。高知県であった部落出身教師の会で奈良県の仲間から西口敏夫先生の『よろこび』の詩を紹介していただいた。そのときにこういう先生がおいでなのか。こういうふうな思いになれるのかというような思いでしかなかった。私にとって部落というのは本当に重い重いものであった。でもこの生徒たちと歩み、そして全体学習という取り組みの中で多くの先生方と本当の思いを語り合い本当につながってから、私はかつて越えることがなかった、絶対に越えることがないだろうと思った峠を私なりに越えていくことができた。

その前年に、全体学習の1年目の記録を『峠を越えて』という冊子にまとめた。そして、翌年『峠を越えて』の2号をまとめた。それと同時に学年主任の先生の大きな励まし、学年集団、共に頑張っていた先生方の大きな励ましの中で、私は『よろこび』という冊子にその1年の10本に及ぶ授業記録をのせ、それによせる私の気持ちを記した記録をまとめた。ある意味で本当の私の夜明けだったし目覚めだった。そういう冊子であった。そして、その当時にまとめた『峠を越えて』の2号の最後に学年主任の先生が文章を書いてくれた。

《私たちは昨年度、1年間の同和問題学習を軸とした実践記録「峠を越えて」をまとめた。思いつきのようにしてできた冊子であったが私たち仲間のうちだけの共有の一つの財産として何かにつけ今年度も活用することが多かった。何よりも、毎日のつたない実践とはいえそれが眼に見える形で手にすることができた時の喜びは大きなものであった。そんなこともあり今年度は当初より、とにかく年度末には一冊にまとめてみようという全員の了解のもとでスタートした。板野郡同和教育研究大会、徳島県中学校同和教育研究大会の会場を本校で引き受け全学級公開授業を行なうということで実践の材料には事欠かない1年でもあった。これを私たちは積極的に自分たちの問題として受け止め実践していきたいと思った。冊子にまとめるにたる実践に取り組みたいというのは一見本末転倒に見えるかもしれないがそれはそれでよかった。大げさに言えば、それで教師として充実した日々を送ることができ、力をつけることができればそれにこしたことはない。そんな思いでのスタートである。

それにしても、一言で言えばきつい毎日であった。昨年度より引き続いての部落問題学習は、まさしく教師としての生き方を問われる厳しいものであったように思う。子どもに教えられるということを実感した毎日であった。部落の子どもたちから本音を突きつけられ立ちすくんでしまうようなこともあった。

「先生、もうきれいな授業やいらん。本気で子どもと向き合う。」

これは、1学期当初の佐野先生の言葉であった。

涙を浮かべる子に、「先生、私せこい。あの子、意見発表会からおろそうかと何度も思うた。」これは後藤田先生の言葉。

みんなが苦しい思いをしてきた。それでも私たちは逃げることだけはしなかったつもりである。一人であれば逃げていたかもしれない。その方が楽だから。しかし、子どもたちの言葉が支えになった。それ以上に私たちはよき同僚に恵まれたことを何よりも「逃げなかった」ことの第一の要因にあげる。疑問点は何でも出し合った。顔が真っ赤になるようにしての議論もあった。夜遅くまで指導細案の検討を重ねる中で、一つ一つの階段を踏み締めるようにして今日までくることができた。みんなが力を合わせたから初めてできたことである。一人の力では何もできなかったこと、それを改めてかみしめる。

3年生としての進路指導においても私たちは、各学級の枠を越えて個々の生徒に焦点を当てて考えることを全員で確認し合いながら進んだ。全員が一つの目標に向かい、一人の子どものこと

について検討を重ねた。全員が心をついにという、楽しい雰囲気の中で仕事を進めることができたのは、この1年間の部落問題学習で共にスクラムを組んできたという我々の仲間意識があったからだと自負している。それにしてもすばらしい生徒たちと先生方であった。昨年度も同じようなことをかいたが、私個人の思いを言えば先生方に感謝の言葉の他はない。板野という初めての任地において、このような楽しく充実できた日々を作ってくれた子どもたちと先生方に改めて感謝したい気持ちでいっぱいである。

大きな声で歌を歌うことのできた卒業式。式が終わった後、校庭で阿部先生のギターに合わせて歌った「友よ」「乾杯」はいつまでも心に残るだろう……。この合唱こそが私たち3年教師団と185名の生徒との2年間の生活や取り組みを象徴したものになった。あの歌声を忘れることはない。苦しい時、悲しい時にあの歌を思い出し、それぞれの道で精一杯の精進を重ねてほしいと思う。そして、またいつの日にかの再会を楽しみにして子どもたちに幸多かれと心から祈りたいと思う。》

当時、学年主任だった仁木先生の文章である。私はすばらしい先生方に支えられながら、励まされながら、一日一日を踏み締めてきたように思う。子どもたちの言葉に支えられながら、歩んできたように思う。生きるということは生かされることであり、支えるということは支えられることなんだということを日々実感していく。私たちが頑張れるのは本当の仲間がいるからだと思う。学年を形成している学校で共に頑張っている先生方の思いを大切に、そしてその先生方とどう本当につながりどう本当に心を通わすか。部落差別に怒り、本当に部落差別をなくそうという関係をどうつくっていくか。それは人間が人間としてどうつながっていくかということになっていくと思う。

私がこの先生方との出会い、またこの子どもたちとの実践の中で、かつて絶対に越えることがないと思っていた峠を越えた。それは私の父親のことだった。

私はどうしても父親のことを語れなかった。語ることはなかった。経済的に非常にきびしい中で私を大学までいかしてくれた父親、私には4人の兄弟姉妹がいる。

親父は私が小学校に入った頃から、いわゆる日雇いの仕事についていた。私は小学校の本当に私を自覚した物心ついたときから、父ちゃんが土方をしていることを恥ずかしいことのようにしか思えなかった。小学校の4年や5年のときのことを思い出す。父親と母親が家庭環境調査にある家族の職業欄に、どう書こうかと相談しておる姿をはっきり覚えている。ある年は農業と書いてくれた。家族が食べるだけの米をつくっていたからだだった。ある年は運転手と書いてくれた。同じ現場で働く人たちをマイクロバスで運んで現場に行く。そのことで日給以外に僅かな手当をもらっていたからそう書いたのだろう。どれもこれも嘘だという認識は当時の私の心の中にはあった。でもそう書いてくれることによって私は安心して学校へ行けた。後ろから集めることを当時の学級担任は要求した。ごまかしていること、嘘を書いていることに対する後ろめたさはあった。私は親父が好きだったのに、でも、将来、親父のようになりたくない。当時、そんな思いでしか親父を見ていなかった。

中学の2年のときに、私は友人の言葉から初めて部落を認識したときもああそうか。やっぱりそうかと思った。中学のときにはたくさん部落の仲間がいた。

高校へいったとき、同じ中学校から進んだ学年の仲間が苦しんでいる姿、いっぱい見えてきた。高校でおこなわれる同和問題のロングホームルーム、これほど嫌なものはなかった。何でこんな無意味な私の神経をさかなでするようなことをするのかというようにしか思えなかった。年に1回、何の前触れもなく見せられた同和問題の啓発の映画が、それも本当に嫌なものであった。同じ部落から通っている友人が、映画の何も関係のないところで嘲るように笑う。その姿を見て、

あいつもクラスで苦しんどんやなあ。自分のこと必死に隠そうとして、部落の人間であることを隠そうとして、しょうもないことで笑ってみせて、自分はそんなと関係ないわっていうことを示そうとしているんやなってことを肌で感じた。

私は高校時代、とにかく徳島を離れること、故郷を離れること、部落を離れること、そのことを第一に考えて大学を考えた。京都で大学生活を過ごすようになる。のびのびとしたい放題の学生生活であった。本当にたくさんの友人ができた。今も京都の地は私にとって大事な場所である。先日も仕事で京都へ行ったおり、私の下宿、私が暮らした京都の下鴨の方へすぐに足が向く。それほど、私にとって大事な場所である。そんな場所であるのに、私は自分が部落出身であることをずっと隠し続けてきた。京都で出会った人のほとんどが私を部落の人間とは知らない。でも、部落差別が厳然と存在する。部落差別を目の当りにしていく中で、私はたまらん思いで息をのみ、自分を殺してきた。

尊敬する人、信頼する人から出る差別の言葉というのはつらいものがある。アルバイト先で私を本当に大事にしてくれたおばさんがいた。本当に私を大事にしてくれた。こんな人と知り合えて本当によかったなあって思っていた人が、ある日私の目の前にさっと4本指を出した。そして「森口さん、あの人はこれだよ」と言った。私は頭の中でその4本指のことは知っていたけれども、直接にそのことを目の当りにしたのは初めてであった。震えてきた。必死に平静を装った。必死になんとも感じんような素振りをするけど、表情はそうではなかった。こわばり言葉をまったく失った。その夜下宿へ帰り、ふるさとの土方仕事をし私を大学までいかせてくれた父親や母親のことを思った。また、祖父や祖母のことを思った。こういう差別の中を生きてきたんか。こういうふうに言われてきたのかって思った。本当にたまらん思いだった。俺は俺でなくなっていく。このままでは本当にだめになっていく。そんな思いに包まれた。

もう一つ私は大学の2年から4年まで下鴨の下宿に入る。そこで、本当に私はすばらしい人と巡り会った。今年84才になられる下宿のおばさん。洗濯までしてくれ、田舎へ帰るといったら土産までもたしてくれた。私の故郷、徳島の父親、母親のことを気遣い、祖父や祖母のことを気遣い、そして「お父さんやお母さん、おじいちゃんやおばあちゃんによろしく」と言われる。その下宿に父も母も祖父も祖母も誰もきたことがないのに、私がただ父と母と祖父と祖母が田舎にいますと言っただけなのに、いつも徳島の家族を気遣ってくれたおばさん。心の底から信頼し尊敬し、本当に好きだったおばさん。そのおばさんがあるときぼつっと言われた。「森口さん、あの人は生まれが違いますからね。かかわらんでね。」それはある近くの部落の青年を指して言われた言葉だった。

そのとき、私は母のように、ずっと心の底から尊敬しているそのおばさんにすら、私の本当の気持ちを偽り、京都を離れていくのかって思った。そして、こんなすばらしい人の中にも部落差別というのは入り込んでいるということを痛烈に思い知らされた。

そして、私はそういう部落差別の中で田舎へ帰ること、徳島へ帰ること、徳島で教員になることを決断する。おそらく、京都で部落差別に何度もぶつかったことが、教師になりたいという思いに自分を駆り立てていったと今思う。

大学2年、3年、4年と世話になったその下宿を引き払うときに、父親が初めて下宿先にやってきた。親戚から1トトラックを借りて荷物を運んでくれた。下宿には後輩が2人いた。後輩たちの父親や母親は年に2度、3度とたずねてくる。私は2人の後輩の先輩として後輩の父親や母親をよく知っていた。後輩2人は初めて私の父親に会うわけで、森口さんのお父さんどんな人だろうかっていうような思いだったと思う。私が下宿を引き払うときに、初めて父親が下宿へくる。それまで本当にただ徳島で働き続け、遊びに京都に出ていくゆとりもなかったし、本当にそうい

うきびしい中で頑張ってくれた父親があったから、大学の4年間本当に過ごせたのだと思う。でも作業服姿の父親の姿を見て、最後の最後ぐらいネクタイの一つでも締めてきたらいいのにとしか思わなかった。

父親はその1tのトラックの後ろに苗木を3本積んできた。1本はスダチの苗木であり、2本はキンカンの苗木であった。私はそれを見たときに「父ちゃん、これなにするん」と言った。そうしたら父親は「お前が世話になった下宿にそれを植えさせてもらおうと思うて」と言った。そのとき私は父親を哀れに思った。こんな礼の仕方しか浮かばんのかと思った。もっと気のきいた礼の仕方があるだろうと思った。そのときは実は軽蔑の心しかなかった。親父にはずっと感謝の気持ちを持ちながらも、親父のその心をどうして素直に受け入れることができないのかと思うのだが、心の底では軽蔑している。親父は一生懸命それをおばさんの住んでいる庭先に植えていく。泥にまみれて植えていく。でも、私はその姿にその行為の一つも感謝できなかった。もっと気のきいた礼のしようがあるだろう。こんなことしか浮かばんのかとしか本当に思わなかった。

でも、私は教員になり、本当にこの教育に取り組む中で、すばらしい先生方や、生徒たちと様々な思いで頑張っていくことによって、この学習に対しての思いが変わっていった。

かつて私は妻にすら父親の仕事を明らかにしなかった。結婚する何ヶ月前かだったと思う。私は妻の両親がどのような仕事をしているかということを知っていたから、妻も私に当然のように特別に意識もせず聞いた。「お父さんは何されよんですか」と。でもそのとき私は答えなかった。私は怒ったように「一生懸命働つきよる。」と言った。答えになっていない。でも、それは私の精一杯の言葉だった。妻はそれ以上何も聞かなかった。それぐらい重かった。でも、この同和教育の実践の中で、私の父親に対する思いというのは本当に変わってきた。そして、今も私はその3年間お世話になった下宿には人生の節目、節目、結婚するとき子どもができたとき、いろんな場面でその下宿先を訪ねる。その度におばさんが言ってくれる言葉がある。

「森口さん、お父さんが植えてくれたキンカンの実がすっかりつきよるよ。でも、スダチはなかなか花がつかんねえ。あの木を見るたびに森口さんがおいでた頃を本当に思い出すんですよ。」

そうしみじみと語ってくれるおばさん。今年、84才になられ、ある意味で私の京都という第二の故郷での心の支えのようなおばさん。そのおばさんが語ってくれるそのスダチの苗木、キンカンの苗木のこと。親父があゝ苗木を植えてもう12年が経過する。そのことを今心の底から感謝している。そして何よりこの同和教育の実践の中で親父の思いが分かり、心の底から「お父ちゃんありがとう」と言える自分になったことが一番の喜びである。

私はそのことを昨年度の同和教育の実践記録としてまとめた『よろこび』2号の一番最初のところにその文章を書いた。かつてだれにも語らなかつたことを恥ずかしいとさえ思ったことを、誇らしいものとして私は書いた。その本が仕上がったときに、私は父親にその本を見せた。

数日後「父ちゃんあの本読んでくれた」と言ったら、親父は顔を真っ赤にした。「親の恥を書くな。」と親父はぼつと言った。僕はそのとき言葉を返した。「父ちゃん、土方して4人の子を育てて大学へやった。自分はなんちゃ贅沢せんと、がむしゃらに働いて、4人の子を大きいにした。立派に育ったことが、頑張ったことが、父ちゃん、恥か。かつこ悪いことか。」と私は父親に言った。父親は言った。「お前のような先生がおつたら、お前のクラスの部落の子はうれしかろうな。」と。その言葉がたまらなくありがたかった。

同和教育は、価値観を根本から変えていく。私たち自身を解放していく営みだと思う。こだわり、怖れ、おびえ、そういう自分の中にあつた真っ黒い差別の塊である部分、そういうものを解き放っていく。そういうものを解放していく。これが同和教育の本質だと思う。今日、こういう機会を与えられたこと、たくさんの先生方にこの思いを伝える機会を与えられたことを明日から

の私の実践の糧として頑張っていきたい。

最後に、今、見ていただいた3つの授業のビデオ、その後ろでじつとこの授業の姿を見ておった一人の教え子、私が教員になった最初の年に学習会で関わった女の子が、今小学校の先生になっている。その子の話をさせていただいて、終わらせていただきたい。6月、10月、11月と3つの大会の授業を彼女は、結婚を約束した同じ職場の教員と参観にきた。部落差別という厳しいものを彼女はひどく感じ、その中で投げやりになりそうな自分、負けそうな自分を相手の男性と共に励ましながら、支え合いながら、頑張り続けてきた。その闘いは厳しいものがあったかと思う。その二人の姿っていうのは、私のクラス3年B組の生徒たちにとっても大きな励みであった。半狂乱になって反対する母親を必死に説く青年の頑張り。そして、一番最初にこの結婚を認めてくれたのは、おばあちゃんであった。一番わからないと思ったおばあちゃんが一番に心を許して「頑張れよ」と言う。そして「そんなことをいつまでもこだわったらあかんでないか」として父親や母親を説いていった。解放されたとき人間は本当に幸せになれるんだと思う。二人の周りの人たちを解放し、立派に結婚をしていく。そのときにもらった結婚式の招待状を紹介させていただいて、私の話、終わらせていただきたいと思う。決まりきった台詞が、文句がならんでいく招待状っていうのがほとんどであるけど、2人が中学時代に学んだ同和問題の学習、いわゆる水平社宣言の学習のを土台にすえ、2人が考え、2人がつくった招待状である。招待状にはこう記されている。

『 生きるということ
愛すること
相手のいのちを尊ぶこと
私たち二人は 永遠に
真実を正視し
すべての人間を尊敬し
すべての人間を信頼し
美しさを求めて 生きていこうと誓いました
私たち 結婚します 』

今、2人はそれぞれの教育現場で自分のすべてをかけて、同和教育の実践に取り組んでいる。結婚式の最後に二人が語った言葉、そのスピーチが今も心に残っている。自らを燃やして、私自身を燃やして、部落差別解消にむけて精一杯に頑張っていきたい。同和教育に取り組んでいきたいという思いを二人は語った。

そういう取り組みが多くの人の中に広がり、多くの仲間の励ましや支えになってより確かなものになっていく。そういうつながりをもっともっと広げていきたいと思う。私たちは毎年実践をまとめてきた。それはその一年一年精一杯自分の越えた峠を確かめていくという願いからである。もう一つはその取り組みをできるだけ多くの人に伝えていきたい。広げていきたいという願いからである。この取り組みを通してつながった仲間というのは、本当にありがたいものがある。本当にすごいものがある。切れない、それはどうしてか。人間のすべて自らのすべてをぶつけた関係であるから、自らの一番しんどい部分、一番苦しい部分を語り合った関係であるから、生きるということをきちっと正視し、頑張ろうとした関係であるから、そういう仲間をもとめ、これからも頑張っていこうと思う。